

記念論文

日本人口論壇昭和初十年史

南 亮 三 郎

豫定目次

はしがき

- 第一章 日本人口問題の諸論議
 - 第二章 「産めよ殖えよ」の人口論争
 - 第三章 人口問題・人口理論の一般研究
 - 第四章 特殊人口問題及び人口理論の研究
 - 第五章 マルサス人口理論の研究
 - 第六章 人口思想史及び諸學說の研究
 - 第七章 歐米人口文献の翻譯・紹介
- むすび

日本人口論壇昭和初十年史

はしがき

本稿は商學討究の十卷完成に因みてその發刊の年（大正十五年・昭和元年）から昭和十年十二月に至る滿十ヶ年間の日本人口論壇を回顧し、この間に發表せられたる主要人口文献を手探りに如何なる人が、如何なる問題を、如何に取扱ふて來たかを編述しながら、昭和初十年間の研究所産とその動向とを描出しようとするにある。本稿は先づ筆者自身の興味と、限られたる準備期間に於ける個人努力の制約とのために、簡にかけるべき問題を可なり狭い範圍に限定せねばならなかつた。讀者はこの範圍を前掲の豫定目次で一覽せられたであらう。次いで筆者は、この稿を草するに當り、纏まつた著書や翻譯書については多く自家所藏本に據つたけれども、雑誌論文の檢索については小樽高商圖書館及び東京商大圖書館を利用し、なほ足らざるものは慶應義塾圖書館と上野の帝國圖書館とについて補ふといふ順路を採つたにも拘はらず、それでもなほ資料を盡くし得なかつたことを自白せねばならない。要するに、かういふ作業を短期間に完了することは個人の力を超えたことであり、又あらゆる文献を残りなく檢索するといふことは特に日本の諸雜誌に不備な現在の學校圖書館の三つや四つを駆けめぐつても殆んど不可能に近いといふことになるのである。——そこへ持つて來て、机上に堆積された雑多な資料を何う整理したらよいか、ひどく筆者を悩ませた。問題は可なり狭い範圍に限定したとはいふものゝ、何分にも十ヶ年にわたる諸家の、思ひ思ひの角度からする、幾つとも數へ切れないほどの著書論文

である。その覚え書きを机上に堆積したまゝ私は茫然として旬日を過ごした。そして遂に、たゞ一つの執筆責任感が筆者をこの稿に驅り立てはじめたのは、約束の期日を過ぎる幾日か後のことなのである。

だが筆者は、さういふ事情にも拘はらず、本稿をもつて無駄な労作とは思ふまい。出来上らない先から筆者には、この稿が勞力徒らに多くしてその割りに効果の上がらないものだといふ見透しは明かにつくけれども、今まで知らなかつた熱心な研究家を知り、思ひも設けぬかくれたる勞作を堀り出して知見を廣め得たことは、筆者にとつて何よりも仕合はせなことであつた。その代りに又、今までに編まれた幾つもの人口文献目録の中に何度も繰り返へし記録せられたる論文が全く愚にもつかぬものであつたり、目録の上では論文としか受取れぬものが事實上は外國文献の邦譯であつたりして、筆者をいらだたせたことも一再に止まらなかつた。謂ゆる文献目録が、今まで多くさうであつたやうに、單に雑誌の表紙を見て筆者名と論題とを轉記する程度のものであるとすれば、後の研究者にどれだけ禍ひをのこすか知れない。本稿はこの點出来るだけ周到且つ親切でありたいと思ふ。——かくて先づ筆者は、本論を、昭和初十年間の日本人口問題の諸論議から始めるであらう。

第一章 日本人口問題の諸論議

學問研究の刺戟なり動機なりが現實生活の直接の問題から觸發せられるといふ例しは決して尠くない。日本に於ける人口問題・人口理論一般の研究が直接に「日本の人口問題」に關する諸論議の發展に負ふてをる部分

が可なりに大きい。昭和元年（大正十五年）は第二回國勢調査の施行せられた翌年であつて、この頃からして漸く日本人の正確なる増加の姿を見ることが出来るやうになつた。政治家は慌てた、學者は唸り出した、ヂヤーナリズムはそれを、いやがうへにも焚きつけた。昭和劈頭の兩三年間は、日本人口問題は政治的、學問的に最も大きい流行問題の一つとなつたのである。

「人口問題は決して今年の新聞問題ではない。」——と矢内原教授は昭和二年七月發表の一論文で書いてゐる——「大正十三年の人口自然増加が七十四萬三千人と發表せられた時も、大正十四年のそれが八十七萬五千人と發表せられた時も、世人はその實數の大なるに驚かされて人口問題の論議が頗るやかましくなつた。殊に大正十四年の人口増加が八十萬臺を突破せることが發表せられて以來、即ち昨年〔昭和元年〕この方、人口問題は火急の問題として一層徹底的に世人に意識せられ、その神経を刺戟した。前内閣〔若槻内閣〕も人口食糧調査會の設置を決定した。雑誌といふ雑誌、論客といふ論客にして人口問題を論ぜざるものはない有様となつた。」しかし「それは昨年の問題でありし如く又今年〔昭和二年〕の問題である。甲論乙駁して一年を過ぎた。而して昨年度〔昭和元年〕の人口増加百萬人と聞きて、世人はアレヨ〜といふ間に燃え擴がれる火の手を見るが如くに思はないだらうか。¹⁾」

人口問題が「燃え擴がれる火の手」といふやうな形容は少しく大袈裟に響くかも知れないが、時人の心に映つた問題の重大さを率直に表現して面白い。まさに「アレヨ〜」といふ間に、「矢内原氏の論文も書かれたので

1) 矢内原忠雄、時論としての人口問題、『中央公論』42年7號（昭和2年7月）34—35頁。

ある。同じ年の十一月には、少しく毛色の變つたものとして、別の筆者がかうも書いてゐる。

「最近人口問題がしきりに喧しく唱へられ、こゝに解決されねばならぬ我國の諸社會問題の最も根本的な或は少くとも最も重要なものゝ一が横はつてゐるかの如く吹聴する者さへある。政府に於ても既に本年〔昭和二年〕初め若槻内閣の時代に人口食糧調査委員會なるものが設けられ、之を引き繼いだ政友會〔田中〕内閣は更に一層『積極的』に、一層根本的に之を解決せんと意氣込んでゐるといふ話である。殊にさる五月十九日、嵐の様な金融恐慌、二十日間モラトリウムで、財界の混亂、生活破綻者の續出の眞只中に於て、下條内閣統計局長が、突如として、昨年度〔昭和元年〕の人口増加百萬を突破すると傳へたるに、さらぬだに社會的不安におびえてゐる人々の注意は一層切實に此の問題に集注されたかに見える。更に又當時新聞紙上で喧しく傳へられた國際經濟會議（五月四日—二十三日）に於て、日本の代表が専ら強調した問題も亦これであつた。日本の代表は、『人口過剰の我に資源を供給せよ！』と叫んだ。²⁾」

かういふわけで當時の人口論文は非常な分量に上つてゐる。雑誌といふ雑誌、論客といふ論客は殆んど總動員の形であつた。これらの主要所産は後の諸章にも分類して記録せらるゝであらうが、今特に日本の問題のみ取扱つた文献のうち特色的なものを一わたり探ぐつてみると、先づ目につくのは、

高田保馬氏「産めよ殖えよ³⁾」である。掲載誌の『經濟往來』は隨筆専門の雑誌としてこの年〔昭和元年〕の三月に創刊せるものであるが、その七月號には特に「人口問題の對策」といふ特輯欄を設けて右高田博士の外

- 2) 淡徳三郎、人口論、『社會科學』3卷4號（昭2年11月）、63頁。
- 3) 『經濟往來』1卷5號（昭和元年7月）、15—17頁。後に隨筆論文集『人口と貧乏』90—95頁に収録。

に高島素之、鶴見祐輔、北澤新次郎、田川大吉郎、山川均、小村欣一の計八氏の隨筆短文をかゝげ、さらに巻頭には末廣巖太郎氏の「毛蟲の人口問題」などといふものを飾つてゐる始末である。高田博士のものも六號活字で僅か二頁あまりの隨筆的小論であるが、人口増加問題などで騒ぐのは愚の至りだとし、「眞の問題は來るべき出生率の減少——人口増加の止むことを如何にして防止すべきかにある。而も此大なる潮流の水先は既に大都市の知識階級に押よせ來つゝある。人口の増加は何等問題ではない、此水先のあとにほうばいたる流のみなぎり迫らむとすることが問題である。」⁴⁾と指摘し出でたところに特色があつた。けれどもその結論は又右の所論以上に異彩を放つてゐた。曰く、「私は信ずる。たゞ産めよ殖えよ。姑息なる救濟策などに頼らなくても事はすむ。窮すれば即ち通ぜむ。殖えさへすれば、而して之に應じてすべての文化的活動ことに經濟的活動が盛んなれば、國內はなほく多數の人口を養ひ得る餘地がある。商工業立國の基礎の確立し得ないのは生活費の不相應に高きが故である、國民の努力乏しきが故である、而してこれは人口の増加の足らざるが故である」⁵⁾と。

もしもこゝに河上肇といふ篤學者が京都大學にゐなかつたとすれば、昭和劈頭の日本人口論壇は今吾々が回顧してさう思ふほど華々しいものではあり得なかつたに違ひない。少くとも高田博士の一隨筆は然かく世人の注意を受けずして過ぎ去つたであらう。だが、そこに、マルクスの理論の武器を鍛へ直して河上博士が待ち構へてゐた。翌月の八月に二冊連続して刊行せられた河上博士の個人雜誌『社會問題研究』は次の三文を載せて、世上に流布する「俗論」を次々に薙ぎ倒して行つた。

4) 高田保馬著、人口と貧乏、昭和2年11月、日本評論社刊、91頁。

5) 同上 94—95頁。

「資本主義末期の一症状としての人口過剰のうめき——人口過剰の原因および對策に關する世論の批判」⁶⁾

「鈴木文治氏の人口制限論（人口問題批判拾遺の二）」⁷⁾

「生活難の事實を言葉の上で否認することにより之を解決せんとする、高田、氣賀二博士の意見——資本主義辯護論の現象形態の一つとしての僧侶的扮装（人口問題批判拾遺の二）」⁷⁾

「燃え擴がれる火の手」は河上博士の鮮かなる手法によつて確かに一杯の冷水が注ぎかけられた形である。火は消えたのかと觀衆は片唾を呑んだ。當の批判を受けた「世論」の代表者達も、或ひは時利あらずとしてか或ひは自家所論の不備を悟つてか、しばし河上博士の論鋒に立ち向ふものとも見えなかつた。深い瘡痕を福岡に養ふたのちやがて高田博士が宿敵に向つて論陣を張り直し始めたのは翌昭和二年の秋のことである。吾々はその経緯を次の章下で詳しく語るであらう。こゝでは論戰を離れての獨立の諸文献を取扱はねばならない。しかし昭和元年にはこの外に目星しい論文も見當らない。八木伸一氏「人口問題」⁸⁾といふのが目に觸れたが、これは學生の論文らしく、人口問題の解決はフレッチャー氏咀嚼法によつて、食物を節するにありなどと論結してゐる。

昭和二年から三年にかけて上田博士主幹の雑誌『企業と社會』は若干の注目すべき論文を掲げた。筆者は次の二つを例示したい。

上田貞次郎氏「我國の人口及食糧問題」⁹⁾

6) 『社會問題研究』73冊（昭元年8月1日）、1—32頁。

7) 『社會問題研究』74冊（昭元年8月10日）、18—34頁。因みにこれら諸文は昭和2年叢文閣より『人口問題批判』と題する單冊子に纏めて出版された。

8) 大倉高商經濟研究會發行『商業經濟研究』1號（昭元年12月）173—187頁。

9) 後に同氏著『新自由主義』昭2年7月、同文館刊、297—324頁に收録。

イー・エフ・ペンローズ氏「人口食糧問題の數的觀察——最近四十七年間に於ける日本農産物の實數量に就
 521¹⁰⁾」

上田博士はこゝですでに、「日本の人口問題は日本人だけの問題でなくして、世界の文明國が協力して解決しなければならぬ國際的大問題である」¹¹⁾ 所以を指摘し、しかし若し「外國が人種の統一を保つために我國人の移住を好まないならば必ずしも移住の自由を要求しなくても宜しい。その代りに我國內において多くの人口が維持されるやうに外國の安い原料や食糧を充分に分配し、且我國の製品に對して門戸を開放してもらはなければならぬ。吾々は人力を外國へ送つて直ちに其天然資源を利用する代りに外國の天然力を商品の形に直して自國に取寄せておいて之に人力を加へるであらう。かくして職業が多く得らるゝなれば必ずしも人口の多きを憂ふる必要はない。是が我國外交の大方針にならなければならぬと私は思ふ」。「然るに現在の日本の經濟政策は此根本方針と背馳して外國の原料及食糧の輸入を制限せんとしてゐる。……日本の貧しき天恵を守つて國產自給を企てつゝ、此既に稠密にして又益々稠密になりつゝある所の人口をよく養ひ、よく衣せ、よく元氣あらしむることは明かに不可能であるとすれば、吾人は外國に向つて門戸開放を求むると同時に日本の門戸をも開放しなければならぬ」¹²⁾と論じてゐられる。こゝで讀者は五年の後——昭和七年秋頃よりする上田博士の本格的研究の出現を銘記せられたい。

ペンローズ氏の日本人口問題研究は昭和九年に纏まつた一著¹³⁾となつて現はれることになつたが、前掲の論文

10) 『企業と社會』24號(昭3年3月特輯現代日本號)105—118頁。

11) 『新自由主義』302頁。

12) 『新自由主義』303—305頁。

13) E. F. Penrose, Population Theories and their Application, with special reference to Japan, California 1934.

は氏が日本に滞在中から懐持してゐた抱負と独自の研究方法との閃きを見せるものである。冒頭に記して曰く、「刻下の日本に於て、經濟學者及び社會學者の論争の最中心點は蓋し人口食糧問題を除いて他に求め得ない。日本の將來の福祉を左右することこの問題にまさるもの亦た絶無であらう。然るに此の種の問題は元來數量的性質を帯びて居り、従つて數的智識を缺いては之が研究到底全きを望み得ない。利用し得べき數的材料にして増加せない限り、如何に机上に論議を闘はし、紙上に美辭を連ねるも、何等研究の深化を計り得ないのである」¹⁴⁾と。かゝる抱負と見地から筆者は明治十二年から大正十四年に至る過去四十七年間にわたる日本の農産物數量指數を算出し、これと人口指數との比較を行はうとしたのである。その結果に基づき筆者の注意するのは次の二點である。――

第一、明治十二年以來食用農産物の産出は大に増加して來たが、その増加はなほ全農産物の増加ほど著しくはなく。

第二、最近の數年間（但し大正十四年は除く）生産特に食糧品の生産は増加の傾向が止んだが、人口は之に對應して停止せず、むしろ増加してゐる。此の如き停止状態は一時的であらうか。或は永久的のものだらうか。また日本の農業生産は既に飽和點に達したのであらうか。之は日本にとつての死活問題であり、その解答如何は頗る重大である。今は私に取つて未だ決定的解答をなすべき時機ではないが、來るべき數年間に於ける數字こそ甚だ重要であらう。¹⁵⁾――かくて、もしも日本が既に、或ひは近き將來に、十九世紀のイギリスがそれ

14) 『企業と社會』24號, 105頁。

15) 同上 116—117頁。

に達せるが如き農産物増加の停止状態に至つたもの、或ひは至るであらうとすれば、その進路は「自由貿易政策」のほかなし、と説いて、¹⁶⁾掲載誌『企業と社會』の一般的政策思潮に合一する趣きを示してゐる。

これより先き昭和三年一月には日本社會學會編『社會學雜誌』第四十五號が「人口食糧問題研究號」と銘打つて出でた。これはその前年十一月にひらかれたる同會第三回大會の講演速記を収載せる模様であるが、戸田貞三氏「自然の人口と人工の人口」、佐伯矩氏「榮養と繁殖との關係」、矢内原忠雄氏「人口食糧問題と社會制度」、今井時郎氏「我國生活難の本質及其打開策」の四文を收め、本邦人口食糧問題研究文献を附載してゐる。前の三文は後に觸れるとしてこゝで直接の關係あるのは今井氏の論文である。氏はこゝで次の如き方程式を立てる。

$$\frac{(\text{生活資源}) \times (\text{資源攝取能力})}{(\text{人口}) \times (\text{平均生活欲求})} = \text{平均個人經濟生活内容}$$

右のうち分子は「人口給養力」を示し、下の分母は右の人口給養力に對して給養を要する人衆〔?〕生活の量及び質を指す、云ひかへれば「左項分數式の分子は社會の生産及生産のポテンシャルを、分母は社會の消費及消費のポテンシャルを指示するもの」である。¹⁷⁾従つて資源少き日本は生活が苦しくなる道理であるが、こゝに更に介入するのは生活資料に對する「分配率」であるとして、次の式に書き改める。

$$\frac{(\text{生活資源}) \times (\text{資源攝取能力}) \times (\text{分配率})}{(\text{人口}) \times (\text{平均生活欲求})} = \text{個人經濟生活内容}$$

かくて曰く「現實經濟生活上所謂ブルジョア階級に分配率の比較的大であり、無産階級に比較的小であると

16) 同上 118頁。

17) 『社會學雜誌』45號, 68頁。

するならば、無産大衆の生活難は殊更痛切なるものあること明白である。¹⁸⁾ 然らばその「解決策」は？ 筆者はこれを移民に見るが如し。

移民といへばこゝに永井亨氏の一論文「人口問題と移民問題」¹⁹⁾がある。日本の對策としては人間の「移民」よりも生産力増加の「移民」を目指せと主張する。これはよき見方だ。曰く「人口問題を解決せんために移民による人口數の減少を期さうとしても實効は擧らず、生産力の増進を期せんための移民であることに着眼しなければならぬ」²⁰⁾と。だが次の結句は讀者を惱まさねばならない！ 曰く「今や日本が恰も一見イタリアの如き環境に置かれてムッソリニの降臨を希ふ徒輩も亦決して少くないと察せられるけれども、先にも説いた如く人口問題は一國の社會又は一體としての社會そのものゝ生産力の問題でありその生産額の問題であり資源（天然）の問題であり能率（心理）の問題であり統制（組織）の問題であり、更にその國の人口數の問題であり出生率及び死亡率の問題であり生活程度又は標準の問題であり、更に又生活資料の分配の問題であり消費の問題であり貯蓄の問題であり、國民がその事を自覺しその問題を解決すべく努力するのでなければ——ムッソリニやレニンの出現せざらんことを希ふやうになるのでなければ——日本の人口問題は解決されない。」²¹⁾ さてもこの六づかしい説話をなす永井博士は他にどういふ論著を出されたのであるか？

永井博士の論著は多い。けれどもこゝで擧示すべき代表的著作は昭和四年一月刊行の『日本人口論』²²⁾であらう。この書には附録として高田、那須、矢内原、河上諸氏の所論に對する批評が收められてをり、内容的にも

18) 同上 69頁。

19) 『外交時報』556號（昭3年2月1日），24—32頁。

20) 同上 30頁。

21) 同上 32頁。

22) 巖松堂書店刊，菊判424頁。

これら諸家の所論を離れては理解に不便であるが、特に日本人口論といふ限定された標題に従つてこゝで論旨の一斑を點出して置かう。

「我國の今日に學者の説く人口論は一般にマルサスかマルクスかその何れかの人口論に囚はれ或はマルサスとマルクスとの何れもの人口論に捉はれてゐる、」と『日本人口論』の著者は先づ喝破する——「しかもマルサスの人口論を排しつゝそれに囚はれ、又マルクスの人口論を斥けつゝそれに捉はれてゐるものが甚だ尠くない」。けれども「世の知る如くマルサスの人口論は食糧論であり貧窮論であつた」し、「マルクスの扱つた人口問題は職業問題であり失業問題であつた」²³⁾。しかし「人口問題はその性質上食糧問題でもなければ職業問題でもなくその兩つながらを合した問題でもない。過剰人口はその本質上貧窮人口でもなければ失業人口でもなくその兩つながらを併せた人口でもない」²⁴⁾。實は「人口問題は社會の生産力が在來の分配比率の下に人口數を收容し得ず、同時に又從來の生活標準の上に人口數を支持し得ないところに發生する。或る分配比率の下に置かれたる社會の生産力と、或る生活標準の上に置かれたる人口數との間に均衡を失すれば過剰人口が生じ、人口問題が生ずる」。かくて問題は「社會の生産力と人口の増殖力との對比」にあるのであつて、「それが即ち社會科學的人口法則であり、社會學的乃至社會心理的人口法則であつて、社會主義的人口法則でもなければ自然法則的人口法則でもない」²⁵⁾と。

こゝからして著者の人口政策も規定せられる——「されば人口問題を解決せんためには天然資源を開發し國

23) 永井享著『日本人口論』、はしがき4—5頁。

24) 同上、はしがき5—6頁。

25) 同上、本文18—19頁。

民心理を啓發すべきは勿論なるが、社會組織の改革的進化と階級的協働と民主的統制とを期するは今日の急務であり、就中經濟組織の合理的改革と民主的協働と社會的統制とを期するは時代の要務であらう。そこに人口問題の解決策がある。」そしてこれが著者の謂ふ「社會科學的人口法則に基づく社會政策的人口對策」であつて、本書はまさに、「かゝる社會科學的見地より又社會政策的立場より現代日本の人口問題を扱はう」とするものである。中には「世界の人口論より日本の人口論へ」(第三・四章)といふやうな、文献史上會つてなきストライキングな、しかしその實吾々には何のことだか未だに意味不明の章などが收められてある。「世界の人口論より日本の人口論へ」？もう駄目になつたといふ「世界の人口論」とはマルサスとマルクスとの人口論であるらしく、それを離脱して獨自の地歩を高揚せんとする「日本の人口論」とは高田、那須、矢内原三氏の人口論であるらしい。少くともこの三氏の所論の批評的考察が「日本の人口論」の主要部分を占めてゐるのである。讀者が茫然自失するとは言ひ過ぎであるかも知れぬが、右の三氏は過分の待遇に聊か共笑を禁じ得ないものがあらう。

越えて昭和五年五月には雑誌「經濟史研究」第七號が「人口食糧問題の研究」といふ特輯號を出した。菅野和太郎氏「我國古代の人口増加」、本庄榮治郎氏「徳川時代の人口論」、山口正太郎氏「近世伊太利人口論考」、高田保馬氏「食糧問題の社會性」外七篇を收めたる、主として日本人口及び食糧の歴史的研究である。この分野に於ける本庄博士の研究は後に間もなく「人口及人口問題²⁷⁾」といふ一著となつて現はれた。内容は上古中

26) 同上、本文27頁。

27) 四六判 258頁、昭5年12月、日本評論社刊。

世の人口、徳川時代の人口、徳川時代人口の都市集中、徳川時代の人口制限、徳川時代の人口論、明治の人口、の六章より成るもので、書名はむしろ『日本人口の史的研究』とでも附すべきものであつたやうに思ふ。本庄氏のその後の研究には「笠間藩の人口政策」²⁸⁾あり、土屋喬雄氏の「諸代官の人口政策」²⁹⁾等と併せて日本人口思想史上に注意せらるべき文献となつてゐる。

かくて時代は昭和六、七年の頃へと移つて行つたが、振り返つて見れば昭和初年に於ける日本人口問題の諸論議は結局次章で詳述する「産めよ殖えよ」の論戦に花咲かせただけで、日本人口そのものゝ基礎的研究はまだ地に着いてゐなかつた。纏まつた研究は日本の學者よりもむしろ歐米の學者によつて果たされてゐた。滿洲事變の必然不可避を豫言する人口學者さへ歐米に續々と現はれてゐた。昭和六年九月、つひにその事變は現實となつて現はれた。この事變はいろいろの深い刺戟を學者に與へた。それは何よりも日本の人口問題研究者を刺戟した。昭和二年の春、夙に日本人口問題の國際的危險性を看破するところあつた上田貞次郎博士は、その周圍の熱心なる若き研究者と共に「日本經濟研究會」を組織し日本人口の基礎的探查に着手せられたのは、まさにこの滿洲事變の勃發を契機とするものと聞いてゐる。『社會政策時報』昭和七年十一月號(百四十六號)所載の「我國現下の失業と人口問題」を手始めに、上田博士及びその一團の人々が發表せる勞作は實に多數の分量に上つてゐる。その主要成果は今日まで既に二卷の論文集となつて現はれた。上田貞次郎編『日本人口問題研究』第一輯³⁰⁾、及び同第二輯³¹⁾がそれである。第一輯の主題は日本人口將來の豫測であつて、詳密なる人口統計

28) 『經濟史研究』37號(昭7年11月)。1—13頁。

29) 『社會經濟史學』4卷2號(昭9年5月)。82—94頁。

30) 菊判381頁、昭8年7月、協調會刊。

31) 菊判495頁、昭9年10月、協調會刊。

的推算から、來るべき二三十年間に於ける日本人口の増加を表出するに至つた。第二輯は更に進みて日本人口動態の現状、特に出生率の變動と、我國民の所得の源泉たる職業の増加及びその種類の變化と、この二つの問題を研究の焦點としてゐる。

上田博士の研究は日本人口問題研究に新たなる、そして恐らく最も強固なる礎石を供するものである。それは劃期的業績と稱へられてよい。そしてこの研究は次の十年間に更に大きい實を結んでゆくであらう。日本人口の統計的研究はこゝから最も多くを期待されてゐる。それにつけても筆者の興味を特にひくのは、人口統計的研究に一段落を告げた最近の上田博士に「我國の人口問題と人口理論³²⁾」といふ一論文のあることである。博士はこゝで人口統計的研究と經濟理論的研究との平行の必要を説き、最近に於ける理論的研究の一般傾向を指摘し、謂ゆるオプチマム理論に疑を懐きながら結局ビヅアリツヂ説に着かうとしてゐられる。この前年に執筆された「マルサスと現代の人口問題」(後出)と併せて博士の理論傾向の一斑を物語るものである。

日本人口問題の諸論議がなほ次章以下に取扱ふであらうやうな諸多の過程を経て如上の研究團體の出現を見るに至つたことは喜ばしい限りであるが、これと相前後して出現した今一つの常設研究機關のあることを附言せねばならない。内務省社會局内に設置された「財團法人・人口問題研究会」がそれである。この會の設立は昭和八年十月、その活動は早くも同年十二月の第一回公開講演會(出演者上田貞次郎、下村宏、永井亨三氏)から始まり、爾來昭和十年十二月までに編纂刊行する「人口問題資料」第十六輯に及び、昭和十年二月には機

32) 河津教授還曆祝賀記念『經濟學の諸問題』昭10年5月有斐閣刊、21—50頁收録。

關雜誌「人口問題」を發刊した。想ひかへせば「燃え擴がる火の手」に呼應して時の政府が「人口食糧調査委員會」を組織してその第一回の會合を開いたのは昭和二年七月二十日のことであり、幾つもの「答申」を提供した擧句、結局常設の研究機關の設置を要望して同委員會が姿を消したのは昭和五年のことであつた。「人口問題研究會」はこの要望に應へて出來たものである。その活動は瞠目に値ひする。研究所員の熱心さにも心打たれる。しかし今日までのところ、この研究會の活動には中心題目がない。東北人口の調査をやるかと思へばマルサス記念の講演會をやり、日本人口問題の解決方針といふ懸賞論文を募集するかと思へば支那人口問題の著書を編纂する。續々として「資料」の刊行されるのは嬉しい限りであるが、その間に何の連絡もなき山なす「資料」と論文の前に立つて吾々は、この會は一體何を研究しようとするのであるかといふ疑念を懷かざるを得ない。特に機關雜誌の出來榮えは心ある者の正視に堪えざるものさへある。研究會責任者諸氏の内省を求めて已まない。

第二章 「産めよ殖えよ」の人口論争

この論争は「産めよ殖えよ」といふ高田博士の前掲隨筆に對する河上博士の鋭き批判によつて昭初元年の八月にそのスタートを切つたものである。これと相似たる論争は矢内原忠雄氏「人口過剩に關する若干の考察¹⁾」に對する大内兵衛氏の批判「人口論におけるマルサスとマルクスの交錯²⁾」であるが、この論争は矢内原氏

1) 『經濟學論集』4卷2號(大14年11月), 1—43頁。

2) 『經濟學論集』4卷3號(昭元年2月), 31—72頁。

の沈黙により凱歌は大内氏の側に起るが如き結末を見せて、何の発展も見ることなくして終つてしまつた。これにひきかへ「産めよ殖えよ」の論争は同じ年の夏に端を發したが、その餘燼は昭和八年の春にまで及ぶほどの執拗さをもつて繼續された。むろん河上博士は鮮かなる批判の演技を見せたあとで、さつさと、滴る血を拭ふて鋒をおさめてしまつた。高田博士が福岡に兵を擧げたのは翌昭和二年の秋のことである。「人口問題の反批判」³⁾がその主戦場であつた。觀戰記者の一人はその當時、こんなことを書いてゐる。「一寸注目すべきことは、河上博士の批評の發表と高田博士の反批判の發表との間に約一ヶ年の時日が経過して居ると云ふことである。論争の裏面觀、穿ち過ぎると誤解になるが、經濟往來にあらはれた隨筆は、後に『反批判』に解明せられたやうな鮮明な立場から出でたものではなくして、寧ろ河上博士の批評に答ふる爲めに、右の隨筆を後から強ひて系統づけたのが、『反批判』にあらはれた人口理論であるのではなからうか」⁴⁾と。ともかくもこゝで高田博士の「人口理論」が整備された形で學界に登場した。そしてその隨筆や論文を一書に纏めたものが同年十一月に刊行された『人口と貧乏』⁵⁾なのである。

反響は直ちに現はれた。その魁をなすものは清澤冽氏「高田保馬氏の人口論の矛盾と不用意」⁶⁾であらう。けれどもこの一文は論争の相手を選ぶことの上手な高田博士の目に止まらなかつた。ところがその前後から「人口食糧問題の今昔」⁷⁾その他によつて人口論壇の一角に立ち現はれた那須皓博士が同年十二月に「河上高田兩博士の人口論を評す」⁸⁾といふ一石を投ぜらるゝに至るや「産めよ殖えよ」の論争はこゝに新たな活力を得來た

- 3) 『改造』9卷9號—10號(昭2年9月, 10月)
- 4) 茫閑學人, 高田河上兩博士人口論戰(學界觀戰記2), 『經濟往來』3卷9號(昭3年9月), 98頁。
- 5) 四六判 260頁, 日本評論社刊。
- 6) 『經濟往來』2卷10號(昭2年10月), 但し筆者未見。
- 7) 『經濟往來』2卷5號(昭2年5月), 1—16頁。

る。那須博士の論文及び批評文は時を移さず『人口食糧問題』⁹⁾といふ一著となつて現はれた。これに對する高田博士の答文「私の人口理論——那須博士の批評に答へて」¹⁰⁾が現はれたのは翌昭和三年の九月であるが、那須博士の所論はこれよりも前に新たなる批評家の反批判を蒙つた。四宮恭二氏「人口過剰とは何か——那須博士の所論についての疑ひ」¹¹⁾がそれである。越えて昭和四年及び五年には吉田秀夫氏の批評文「收穫遞減の法則の顛落——それによるマルサス『復位』の批判の豫備的階梯」¹²⁾及びその續篇「收穫遞減の『法則』——『法則』を中心として人口論を那須博士に學ぶ」¹³⁾が二年がかりで現はれたりして、那須博士の投じられた一石は期せざる波紋を學界にひき起すことになつた。こゝで筆者はしばし「産めよ殖えよ」の論争の本流から離れて、那須博士の所論とその批判とを瞥見したいと考へる。

那須博士の理論上の立場はその代表作『人口食糧問題』の巻頭に置かれた一文「人口食糧問題の今昔」に簡明に表出せられてゐる。氏は曰く、マルサスの「人口論は今日多數の人々によりて甚しく疑はれて居る。或は云ふ、マルサスの人口論は今日に於ては死したるものであると。果してさうであらうか。非難の聲は或ひは統計的數字を根據として、或ひは生物學の見解に基きて、或ひは國際貿易の事實によりて、或ひはマルキシズムの理論の上に立ちて各方面より擧げられる。嘗て一世を風靡したマルサスの所論も今や果敢なき終焉を告げたかの如く見ゆる。マルサスは果して今日何の意味をも持たぬであらうか。」¹⁴⁾著者の答は、然らずといふにある。このためになす所論は次の通りである——

8) 『經濟往來』2卷12號(昭2年12月)

9) 四六判319頁, 昭2年12月, 日本評論社刊。

10) 『經濟往來』3卷9號(昭3年9月), 1—21頁。後に高田氏論文集『價格と獨占』(昭4年3月, 千倉書房刊)295—330頁に収録。

11) 『彦根高商論叢』4號(昭3年3月), 109—122頁。

12) 『大倉學會誌』2卷2號(昭4年12月), 1—31頁。

第一、土地生産力と人口との關係についてのマルサス説は、「其の後、土地收穫漸減の法則が発見せらるゝに及んで、彼れの説は茲に有力なる支持を受くるに至つたのである」¹⁵⁾。第二、「内外の生物學者や統計學者などの中には、過去の人口統計に依りて人口増殖率が一種の曲線をなすべく趨勢あるを見出し之を以て生物學的法則なりと看做す人もあるけれども（パール教授や宮島幹之助、稻垣乙丙氏等）、此等の數字は人間の生理的狀態の變遷に基かずして寧ろ社會的狀態の變遷に基くこと大ならずやとも想像せられる。故に之を以て生物學的法則存在の證據となすことを得ない」。従つて「此の疑はしき生物學的法則によりてマルサスの人口論を擊破」することは「當らない」¹⁶⁾。第三、「人口が増加しても商工業に従事して外國より食糧を購入すれば差支へなしとの説は、「マルサス説の補充であつて其の全然たる否定ではない。又一步を進めて考ふれば、外國の農業それ自身が纏てマルサス説及び土地收穫漸減の法則の力を感じて行詰る時あるべきを忘れたる論である」¹⁷⁾と。最後にマルクスの人口論を批判して曰く、

「特定の社會經濟制度（S）は、生産に關する人間の知識技能（I）の發達並びに該制度下に於て働く所の勞働力の分量（L）に對して種々の影響を與ふるものであり、而して（I）及び（L）が天然資源（N）に對して働きかけて生ずる所の生産額（P）が、社會經濟制度と相俟つて該社會に於ける生活程度（M）や人口總數（B）を決定するものであるから、生活程度（M）及び人口總數（B）の特定なる關係に命名せる過剩人口（U）なる概念は、決して社會經濟制度と全然無關係なるものではない。此等、（S、I、L、N、P、M、B、U）

13) 『大倉學會誌』 3卷3號（昭5年12月），35—66頁。
 14) 『人口食糧問題』 18頁。
 15) 同上 23頁。
 16) 同上 26頁。
 17) 同上 27—28頁。

は各々其の相互間に於て複雑微妙なる影響の交換をなすものである¹⁸⁾。ところが「マルクスは専らSに着目し、之が産業豫備軍即ちマルクス流の過剰人口Rに對して決定的なる原動力なるを唱へた。SとRとの關係を説く限り彼れの説は差支ないが、更に一步を進めてUとRとを混同して、SがUをも全部決定すると彼れが考へたものとすれば、それは誤りであると云はざるを得ない。RはUの中に含まれて居るけれども、UはR以外のものをも含むことがあるし、又Rを含まずしてR以外のものゝみを含むで居る場合を考へ得る」。かくて「かゝる際の過剰人口Uが假りにマルクス流過剰人口Rの外に尙Tなる分子を含むとすれば、即ち「 $U = R + T$ 」なりとすれば、社會經濟制度を變革することによりてRは之を消滅せしめ得とするも、Tは尙殘存するを免れないであらう。¹⁹⁾」

かくて著者は結論に曰く、「マルクスの人口論はマルサスの過剰人口の内容を分析して現代に於ける其の重要な一部を摘出せるものであり、此の意味に於てマルサスに對する大なる補充であるが、然もマルクスはマルサスを全然顛覆し去りて之を無意義ならしめ了つたのではない²⁰⁾」と。「而して今日の日本及び世界に於て人口問題が熾烈を加へ來りしは、多くの國々に於てマルクスの人口論に説く第一種過剰人口の壓迫を感ずると共に、特に日本、伊太利等の人口稠密にして天然資源乏しき國に於てはマルサ斯的なる第二種過剰人口の壓迫をも漸く感ずるに到つたから、又は到らむとして居るからではないかと思はれる。²¹⁾」といふのである。

かゝる立場から那須博士が高田説を如何に評し、後者が又前者に如何なる應酬をなしたかは、こゝで左程大

18) 同上 35—36頁, 傍點原文。

19) 同上 36—37頁, 傍點同斷。

20) 同上 38頁。

21) 同上 39頁。

きい問題ではない。問題はむしろ、かゝる立場にある那須博士が相次いで二人の論客から如何なる批判を受け
たかである。先づ前掲四宮氏の論文は、那須博士がモムペルトに従つて「平均的生活程度」の低下を人口過剰
の象徴と考へられたところに論點を集中し、次の三つの疑問を提出する。——(A) 那須博士は、人口過剰の事
實の決定的標準を、平均的生活程度に求めらるゝが、その平均的生活程度とは、如何なるものを指して云ふの
か。(B) 那須博士は、人口増加の結果、此の平均的生活程度が低下すれば、人口過剰が考へられると云はれる
が、一體どの位低下すれば考へられるのであるか。(C) 結論として、博士は、人口過剰の現象が問題となるの
は、必ずしも常に、下層階級に於てのみではなく、その他の階級に於ても亦同様に問題たり得ると云ふ。果し
てさうであるか。私の疑ひは結局、之である²²⁾、と四宮氏は論じてゐる。本稿の筆者は思ふ、この論文は單に那
須博士説批判としてではなく、モムペルトの見解一般に對する深い批判を含んでゐる。含蓄多きものとして讀
まれねばならない。「凡そ社會科學の領野に於ては、社會關係を輕視して把握し得べき一つの現象も存しない。
人口問題の場合も亦さうである。人口過剰と云ひ人口過少といふ、それは決して、動物の一屬類としての人類
頭數の過不足を意味するものではない。實に一定の社會關係の下に於ける社會成員數の過不足の問題である」²³⁾
と。これは尤もな所説だ。だが續いて「マルサス人口法則の過誤が、かゝる認識の缺如に因由せることは、吾
々の既に周知の事實である」と斷ずるとき、この筆者も亦マルサス理論の「認識の缺如」を示してゐる。「社
會關係」「階級關係」は、「吾々の周知の」如くは、マルサス自身の無視したところではないのである。

22) 『彦根高商論叢』4號(昭3年3月), 113頁。

23) 同上 119頁。

次いで吉田秀夫氏の「前掲批評文は那須氏『人口食糧問題』中の所説に關聯して、マルサス人口論と收穫遞減の法則との交渉如何を論ぜんとするものであるが、第一文では收穫遞減の法則は「法則」たり得ないことを斷する。但し「傾向」はあるといふ。同時にマルサス人口論にはこの法則の確認なしと説いてゐる。進みて第二文では那須氏の諸著に散見せらるゝこの法則の説明を批判し、一方その不當を指摘すると共に、マルサス人口論はそれによつて毫も救はれ得ないことを論斷する。結論に曰く、「——博士〔那須氏〕の諸著に於いては、收穫遞減の法則は理論的に死滅してゐる、残るものはたゞこの法則を救濟せんとする博士の『意圖』のみである。従つて、また博士の諸著に於いてはマルサス人口論は理論的に死滅してゐる、残るものはたゞマルサスを救濟せんとする博士の『希望』のみである、²⁴⁾」と。かういふ批判家にかゝつては『人口食糧問題』の著者の出足が挫かれてしまふ。賢明なる方法の一つは黙殺に附することにあるらしい。那須博士は——或る批評家の言葉を借りれば——河上・高田の論争に「横槍的批判」を加へたまゝ、さつさと戦塵を掃ふて書齋に歸られたのである。

叙述の筆は少しく前後するが吾々はこゝで再び昭和二、三年頃に立戻つて、河上博士説がひき起した別の方面からの二三の反響を説かねばならない。その一つは淡徳三郎氏の「人口論」²⁵⁾である。これは河上博士の人口問題觀の批判から始まつて、高橋龜吉、猪股津南雄諸氏の右にからまる所説を吟味せしもので、根柢的には河上博士の線には添ふてゐるが、これを批判して次の如くに云ふ。——

24) 『大倉學會雜誌』3卷3號(昭5年12月), 66頁。

25) 『社會科學』改造社刊行雜誌, 3卷4號「マルクス主義全解特輯」(昭2年11月), 63—82頁。

「河上博士は何を證明したか？ それは唯次の數箇に盡きる、即ち、(一)人口過剰は資本主義機構そのものに起因する疾患である事、(二)而してそれは資本主義の擴大發展につれて深刻となる、(三)従つてそれは現代特有の問題でもなく、(四)我國特有の問題でもない。(五)それは唯資本主義機構そのものを××する事によつてのみ解決出来る。——以上五箇の命題の中、一、二及び五の命題は正しい。然し(三)及び(四)の命題は、尙多くの問題を未解決に残してゐる。第一、博士は、人口過剰の問題は現代特有の問題ではないといはれ、又最近殊に此の問題が瀕りに喧傳される所以を、唯資本主義の矛盾がより擴大發展したといふ點に求められるのであるが、然し乍ら最近に於ける資本主義の矛盾の發展が如何なる性質のものであるかについての分析が全然缺けてゐる。第二、博士は、人口問題は我國特有の問題ではないといはれるが、博士の引照してゐられる如く、人口密度は各國同一ではないし、資本主義的發展の性質も、アメリカ、イギリス、日本とでは大いに異なるは疑ひない事である。博士の所説は、資本主義的機構の同一性を固執するにとゞまつて、その特殊性を没却するものではないか？——要之、河上博士の人口論の最大缺陷は、現代の特殊性、日本資本主義の特殊性を全然没却してゐる所にある。而してこれは博士の所論が、單にマルクス説の公式的適用にとゞまり、之を具體的に發展させる事を知らない點に基く。公式主義はマルクスの言葉の紹介としては意味はあるが、決して現象のマルクス主義的理解たり得ないのである。²⁶⁾」

こゝからして筆者は、日本資本主義の具體的分析には高橋氏説を大いに重視すべきものとし、なほ積極的に

26) 同上 68頁，傍點原文。

は日本農村の過剰人口問題を提示してゐる。筆者の言葉をもつてすれば、結局本文は「生活難の問題から人口問題を經て戦争論に驅り立てる偽購を曝くと共に、民衆をこゝ迄驅りたてる事によつて巧に人口問題を國防——戦争準備問題にすりかへる猾さを看破し、同時に人口問題の此の發展、否、すりかへの手品を理解」せしむるに役立てようとするのであつて、²⁷⁾この點ではむしろ高田博士説への間接的批判をも含んでゐるものと見てよい。

その二は『法文論叢』所載の早住義雄氏「資本主義制度に於ける人口過剰問題——ステルンベルグによる問題の提出」²⁸⁾である。この掲載誌は九州帝大法文學部内・法文會學藝部の發行にかゝるもので、學生の雜誌らしい。しかし本論文は、マルクス説批判を中心とせる高田博士の所論に答へつゝ、別にステルンベルグの方法によつて資本主義社會に於ける人口過剰の現象形態を歴史的に分析しようとする意圖せる熱心な一研究である。筆者によれば、(1)人口の自然的増加、(2)資本の有機的組成の高度化の結果機械による労働者の放逐、——以上二つが人口過剰の内部的要因——(3)營利的中等階級の收奪化、(4)田園からの農民移動、(5)國外移住、(6)資本の膨脹——以上四つが外部的要因——で、「資本主義の歴史は、これ等の要因の何れに偏重するか、の觀點の下に書かれねばならぬ」²⁹⁾と述べてゐる。この觀點は聰明である。本論が未完に終つてゐるのは惜しい氣がする。

その三は東浦庄治氏の「人口理論脛見」³⁰⁾である。河上・高田・那須論争に關する意見だが、氏の立場はマルクス説擁護にある。従つて、高田説にも、那須氏の折衷説にも不満を表明してゐる。「我々は人口問題に就いてのマルクス理論の克服を期せんには、猶多くの努力を要することを明かにし得たと思ふ」。「最後に今日我が

27) 同上 82頁、傍點同斷。

28) 『法文論叢』2卷1號(昭3年3月)、42—57頁。

29) 同上 56頁。

30) 『帝國農會報』18卷7號(昭3年7月)、52—64頁。

國に於て喧しき産業合理化運動に就いて見るも、それが資本の組成を變更し、可變資本分の減少を來し、一層一時的失業問題を起すことあり得るは明かであらう。而してこの豫備軍の増大が一時的勞賃の減少として表はれることは言ふまでもなく、資本主義社會の發展はこの運動の連續ではあるまいか³¹⁾と説いてゐる。

なほ本論争については、前に引用した通り茫閑學人「高田河上兩博士人口論戰³²⁾」といふやうなものもあり、永井享博士もこれに一役を買つて出られたことはその著「日本人口論」の附録諸文が傳へてゐる。しかし本稿の筆者がこゝで特に異彩あるものとして傳へたいのは室伏高信氏「人口問題の文明批評³³⁾」である。

「人口問題は今日の流行問題であるのか。われ／＼は今日はこの問題を語ることなくしては時代を語ることはできないのであるか。」と室伏氏は書き出してゐる。これも時代が生んだ一つの人口論文だ。しかし所論は仲々面白い。結局、今日の人口問題の意義を資本主義文明の没落と關聯せしめて理解しようとするにある。こゝからして筆者は先づマルクス主義者が、十九世紀後半の經濟事情を背景として造り上げた理論を以て今日の時代にも當てはまるものとして、議論のむし返へしを行ふてゐる愚を指摘して曰く、「エンゲルスが先づ笑ひ、カウツキイが續いて笑ひ、そして日本のマルクス主義の一團が今日は笑つてゐる。河上肇がその代表的な一人である。彼は高田保馬を、鈴木文治を、若槻前首相を、大阪朝日、毎日をみな笑つてしまつた。それはたしかに笑ふに應しいのである。笑ふべきほどの人口論しかわれ／＼は聽かされてはゐなかつたのである。けれども日本においての人口論が如何に笑ふべきものではあるにしても、それは今日も笑つて濟まされるところのもの

31) 同上 64頁。

32) 『經濟往來』3卷9號(昭3年9月), 96—103頁。

33) 『中央公論』42年12號(昭2年12月), 35—50頁。

であるのか。エンゲルスが笑つた時のごとく、われ／＼の時代は笑つて済ましてゐることのできる時代であるのか³⁴⁾。そのうへ「この天下の物笑ひを笑つてゐる社會主義者、本物の社會主義者は如何なる立派な識見を示したか。マアクスからのクオテエション。その説明。皮肉を笑ひ。そして何が残つてゐるか。半世紀も前に死んだ人間の學説を掘り出してくるよりほかに今日の問題を解釋することはできないのであるか。」³⁵⁾

「皮肉な笑ひ」を笑つた河上博士は、こゝでまた「皮肉な笑ひ」を浴びせられた。だが、その論敵の高田博士も手厳しい批判を受ける。この批判は何は措いても傾聴に値ひする。即ち人口問題對策としての商工業主義を批判して筆者は云ふ、「われ／＼の日本においての十九世紀の遺物が如何に多いことであるか！ 政治家はいふ、先づ商工業を勵獎せよと。人口食糧問題の調査委員の諸君は曰く、先づ商工業を振作せよと。社會學者（高田保馬）もまたその尻馬について曰く、人口問題の解決は商工業を盛んにするのほかはないのだと³⁶⁾。だが彼等は工業主義がすでにその破綻を示してゐることに氣付かない。マルサスやジエボンスはその必然的行詰りの法則を示した。そして今や「商工業主義の總決算の時がきた。あのよろめいてゐる大英帝國の足もとを見るがいゝ。あの衰頹しつゝある英國の紡績業について見るがいゝ。あの産業的衰頹と階級的混亂と民族的分裂の最後の痛ましい光景について見るがいゝ。だが英國だけが過去であると思つたら大きな間違ひだ。英國は兆候だ。英國が過去であるといふよりは工業主義が過去である。總じて商工業主義が過去であるといふことに氣付いたものでなくては、今日は世界の轉機を、その最高の秘密において語ることはできないのである。」³⁷⁾

34) 同上 37頁。
 35) 同上 36頁。
 36) 同上 46頁。
 37) 同上 47頁。

では何故に工業主義に破綻が生ずるか。それは一言にして、工業は自存しうるものではないからだ。それは常に農業の上に立つ。「増加した英國の人口は鐵と石炭とを食べてゐたのではなくして外國の農産物を食べてゐた」のである。「こゝに重大問題がある。こゝに人口問題についての最高解決がある。——と筆者は叫び續ける——人口の限度は商工業に依存してはゐなかつたといふことである。そしてまたそれは常に農業のうへに依存してゐたといふことである。……商工業の勃興が人口の増加を支へて來たのではなくて、農業の増大が實にそれを支へてきた。そして農業の増大だけがそれを支へてもきたし、支へる力をもつてもゐたのだ。資本主義的生産方法が封建社會についての過剰人口を解決したといふのはたゞ便宜上の言葉である。資本主義的生産方法が過剰人口を解決したのでもなく、若くは世界の増加しゆく人口を支持してきたのでもない。増大してきた農業の力だけがこれを解決したのだ。主として新大陸の農業が。……近代における人口増加は、この農業の發展の結果でもあり、また農業發展の限度においてもある。Permanent increase of agriculture always causes increased population somewhere —— われ／＼は再びマルサスを讀むべきである。マルサスは凡てを語つてゐる。世界の商工業主義者はマルサスを讀むべきである。マルサスこそ彼等の夢を破るところの明確な法則を世界に示したのだ。あらゆる商工業主義の必然的行詰りの法則が彼によつて示され、そして百餘年の歲月はこれを世界の現實のうへに證明したのである。³⁸⁾」

右の一文は今吾々の主題とせる人口論争に直接參加したものと云へないが、畢竟この論争によつて觸發さ

れたものであつて、それはこの論争に對する一側面觀を成すと共に、日本人口問題の對策として繰り返し主張せられたる謂ゆる商工業主義の虚を衝かうとする鋭い批判を含んでゐる。この意味では本文はむしろ前章の日本人口問題の諸論議中に擧示するのが至當であつたかも知れない。——ともあれ、吾々は今や、以上幾多の派生的批評文を横ぎつて、漸く「産めよ殖えよ」の論争の本流に戻り得ることになつた。本流とは何であるか？

河上博士去り、那須博士退いてのち、餘燼消えやらぬ論壇に恰好の敵もあらばと待ち構へたる、たつた一人の騎士があつた。高田博士がそれである。時は昭和四年、春から夏にかけて、二人の新人がその前に立ち現はれる。その一人は禮を厚うして高田博士に云ふ、「乞ふ、學界、殊に社會學界の大先輩に對する私の非禮を許されよ！」それはまがひもなき向坂逸郎氏「貧乏と人口——高田教授『人口と貧乏』を読む³⁹⁾」であつた。今一人の人物は、立ち向ひさま高田博士に云ふのである。あなたの「正體を洗つて見れば、僧侶マルサスの代辯者に過ぎなかつたのだ！」この若き闘士こそ、二ヶ年がよりで那須博士にも喰つてかゝらうとする吉田秀夫氏「高田博士とマルサス⁴⁰⁾」に外ならない。さてこの二人の新人との交戦はどう落ちついてゆくか？ 讀者は今、「産めよ殖えよ」の長い論争が第三の、而して幸にも最後の、局面に進みゆくのを見られるわけである。

高田博士の應戦はその時を隔つる四年——昭和八年一月に至つて果たされた。「人口に關する小論——向坂逸郎氏の批評に答ふ⁴¹⁾」がそれである。本文はしかし實質的には、かつて「企て」られた「一の試論」につき「その要領を再説すると共に、再考を加ふべきものは再考を加へよう」としたもので、「産めよ殖えよ」の一隨筆

- 39) 『社會科學』5卷1號(昭4年3月), 31—57頁。因みに本文は、改造社版經濟學全集26卷「マルクス經濟學說の發展」(昭4年6月刊)に收められたる向坂氏の論稿「人口理論」576頁以下に、「極めて僅かの變更を除けば」そのまゝに「再録」されてゐる。
- 40) 『新興科學の旗のもとに』2卷7號(昭4年7月), 53—78頁。
- 41) 『經濟論叢』36卷1號(昭8年1月), 23—37頁。

から始まるところの過去八ヶ年にわたる高田博士の數多き論争文に結末を與へると共に、その思想の一應の最終形態を示すものと見ることが出来る。依つて吾々はこゝで、この論文に従ふて高田博士の人口理論を描いてみるのが便利であらう。

まづそこに「人口の靜的法則」を示す有名なる「人口方程式」がある。曰く「社會の低き階級の人口をBとし、其生活標準をSとする。又其社會の生産力をPとし、此階級に對して生産力によつて生産せられたる生産物のうちから、此階級に與へらるゝ割合を示すところの係數、即ち分配係數をdとする。さうすると、人口と生活標準との積は分配係數と生産力との積に等しい。此關係は次の方程式を以て示される。

$$B \cdot S = d \cdot P \quad 42)$$

しかしこれは均衡状態を示すもので、「人口増加の傾向は不斷に此均衡をかきみださうとする。然らば均衡は如何にして回復せらるゝか、これは人口の動態に關する問題である。此均衡の恢復は生活標準の一般的低下によつて、分配係數の變更によつて、生産力の増加によつて、實現せらるゝことが出来るはずである。けれども、生活標準の低下は容易のことではない。分配係數の變更も急速には行はれぬ。そこで、人口過剩の傾向は大體に於て生産力の増加によつて打ちかたれてゐる」。そこで「此生産力の増加が何によつて促さるゝかど一の重要な問題として残る。」⁴³⁾

この生産力の増加は「生産技術の變化」から起る。けれども「それを産業の中にとり入れ、生産力の増加と

42) 同上 23頁。

43) 同上 23—24頁。

して實現せしむるものは、常に産業的活動に於て能動的地位を占むる人々」「企業者」のことである。「此等の階級に於ても人口は、社會の特別な禁壓がない限り、人口は増加しようとする。而もそれはつねに體面の維持、發揮を困難ならしめようとする。ことに兒孫をして同様なる社會的地位を保たしめようとする限り、さうである」。そこで「前の方程式について云へば、Bが増加しようとするばかりではない、Sもまた上昇しようとする」。しかしSの上昇は「人口増加の間接なる結果に外ならぬ。人口増加にもとづく社會的事情によつて促さるゝものである。人口の増加の壓迫から體面が維持されがなくなるか、それだけでなく、體面の要求を強く満足せしめようとする爲に、企業者の手によつて社會の生産力が増加せられてゆく」。かくて生産力は「人口の直接なる、又は間接なる作用によつて前方に押しやられる」といふのである。⁴⁴⁾

ところで、この生産力の「増加は人口増加よりもかへつて大なるが故に、〔本論文ではその論證はない〕徐々ではあるが、低い階級の生活標準が不斷に高められてゆく。もとより分配係數がつねに變革さるゝ傾向がある。けれども、それはむしろ社會の階級組織そのものゝ變革として行はるゝものである」。かくて人口方程式上の變動をひき起す「根本的なるものは人口の自動的增加である」。これを「更に一層立入つて云ふならば、人口増加の結果として、社會組織の姿が決定せられ、此社會組織に決定せられて成立したる體面の爲の競争が生産力を増加せしめ、一方は此増加、他方は社會組織によつて定まれる分配係數の共同作用によつて低き階級に與へらるゝ生産物總量が定まる。此總量は生活標準の若干の向上を許しつゝ、人口増加の限度をたえずかぎ

44) 同上 25—27頁。

りつゝある。生産力による人口増加の制限は人口自らの間接的なる自己制限である。社會に於て自己運動を營むものは人口の外にあり得ない。⁴⁵⁾」

以上が、「再考を加ふべきものは再考を加へよう」とした高田博士の理論の骨子を成す。順序は少しく前後するが、六年前の同氏論文集『人口と貧乏』に含まれたる積極的主張に對して向坂氏が加へたる批評は、大づかみに云ふて三點に關してゐた。その一は、かの人口方程式の「兩項、 $P \cdot R$ 及び $B \cdot S$ が何等「か」の意味を有するのは、恐らく d が一に等しい場合、即ち社會に於ける分配が平等であり、従つて又生活標準が單一である場合のみではないか？」然るに現實の社會に見らるゝ如く「階級の存在を前提とする限り、從て又不等なる生活標準の存在を前提とする限り、かゝる式は意味を有し得ない、⁴⁶⁾」といふこと、その二は、謂ゆる人口の靜的法則がその均衡を破る場合の説明は、資本主義社會に關する限り一貫してゐないといふこと、即ち高田教授は資本主義社會に於ては「必ずしも人口の壓力をまたず、主として利潤獲得の競争に基きて、生産力が急激に増加する、⁴⁷⁾」といふてをるけれども、「これはつまり、その人口法則が資本主義社會では妥當せぬことを意味せざるを得ぬ、⁴⁸⁾」といふのである。その三は、高田教授の方程式には「失業者」の存在が脱落してゐるといふことで、⁴⁹⁾ 結局高田教授は「資本主義的社會の歴史的性質を人口理論に取り入れる事によりて、此の社會に於ける人口問題の社會的性質を充分に展開されなかつた、⁵⁰⁾」といふのである。

右の批評に對する高田博士の前掲答辯のうち注意すべき點は第二點であつて、資本主義社會に於ける動力も

45) 同上 30頁。

46) 『社會科學』5卷1號(昭4年3月), 40—41頁。

47) 高田保馬『人口と貧乏』209頁。

48) 『社會科學』5卷1號, 42—46頁。

49) 同上 47—49頁。

50) 同上 50頁。

また人口増加であると明言するに至つたことである。これは高田博士の前掲引用文にも示されてゐるが、博士は重ねて、「此利潤獲得の競争によつて生産力が増加するにしても此競争の強さが企業者たちの階級内部に於ける生活の壓迫、人口増加の壓力に基くことは、前に述べたる通りである。私はすでに生産力の増加が利潤獲得の競争にまつことは、やがてそれが人口の壓力にまつことであることを詳論した⁵¹⁾」と述べてゐられる。これは可なり苦しい答辯である、しかし博士の所説はこれで一貫することになつた。但し他の二點については論争の發展は見られない。

次いで然らば吉田秀夫氏の批判は何を指摘したものであつたか？ その論題「高田博士とマルサス」が聯想せしめるやうに、高田博士が『人口と貧乏』その他に於て口を極めて叫ばるゝマルサス批評が無根據のものであり、彼れの理論と別のものとして高揚せらるゝ博士の「理論」こそ實は眞實のマルサスと程遠からぬもの、「それは大綱に於いてマルサス説の縮小再生産である」所以を指摘しようとしたものである。

曰く、「博士が大童になつて切り込んで居られるマルサスは不幸にして實はマルサスでも何でもなく博士の頭腦の中に博士自身によつて作り出された幻のマルサスであり、博士が大上段に構えられた大太刀こそマルサスが百年の昔に鍛え上げて置いたものではなかつたか？ それとも又何處かにマルサスといふ同名異人が居て、この吾々には身許不明のマルサスを博士は英國人の牧師マルサスを典據として討伐されるとでも云ふのか？」⁵²⁾又曰く、「博士の事々しい『人口方程式』乃至は『天秤臺』は決してマルサスを否定するものではなく、かへつ

51) 『經濟論叢』36卷1號, 34頁。

52) 『新興科學の旗のもとに』2卷7號, 77頁。

てマルサスの再生産であり、それを超えて一步の前進もないのである。⁵³⁾「これでも博士はこり性もなくわが天
秤臺こそは天上天下唯我獨尊也と呼號し續けられるであらうか？」⁵⁴⁾——等々々、舌端は逆つて「學界の大先輩」
を臺なしにしてしまつた形である。

高田博士も流石にこれには腹が立つたらしい。向坂氏への前掲答文の末尾に於て博士はこれに觸れたが、吉
田氏の評文は「極めて杜撰にして學問的に無價値のものである」との理由をもつて「正面から之を批評する意
志をもたぬ、⁵⁵⁾」として突つ放し、「其杜撰であることの證據」を一つ二つ指摘しただけで、「これ以上説くまい。
たゞ、盲目蛇を恐れざる其勇氣に驚くのみである、⁵⁶⁾」と切り捨て、しまつた。かうなつてみると、吉田氏もま
た無念であつたらう。時を移さず吉田氏は重ねて「高田博士とマルサス再論⁵⁷⁾」を書いた。文末に高田博士の毒
舌(?)を引いて、更に毒舌を附加して曰く、「その意は恐らく、私はマルサスに關しては盲目であり、博士は
蛇の如く有能俊敏であるといふのだらう。盲目にも拘らず私は蛇の執念を真似て繰返して云ふ。博士のマルサ
スに關する理解は依然として舊の如く、従つて博士のマルサスは本物のマルサスとは似ても似つかぬものであ
る、⁵⁸⁾」と。

かくて昭和元年の夏八月、室伏高信氏の評言をもつてすれば河上博士の「皮肉な笑ひ」にスタートを切つた
「産めよ殖えよ」の人口論争は、入れ代り立ち代つての諸闘士の混戦の後に、つひに昭和八年の春三月、「蛇の
執念」の泥仕合ひで結末を告げたわけである。今、振り返つてこの論争の跡を眺めてみると、可なり多い副

53) 同上 72頁。

54) 同上 78頁。

55) 『經濟論叢』36卷1號, 36頁。

56) 同上 37頁。

57) 『批判』(『我等』改題)4卷3號(昭8年3月), 59—65頁。

58) 同上 65頁。

産物も見られ、又全體として人口理論の研究に與へた刺戟も尠少ではないが、論争それ自體の中から成長した主産物は結局、高田博士の「人口理論」に歸すると云へるかも知れない。この人ほど熱心に、しかも氣長く、敵手を選んで切り込んで、たえず自家の理論を鍛えて行つた人はない。だがしかし、その理論は一體何程の獨自性を主張し得るものであるか、といふ疑念は一部の讀者の頭腦を去來するであらう。眞實のところ、吉田氏の批評は最も痛いところを衝いたものである。不幸にしてそれは事もなげに一蹴されてはしまつたが、「高田博士とマルサス」とが何ういふ交渉をもつものであるか、博士の説はマルサスからどれほど隔つたものであるか、といふ根本問題は少くともマルサスを眞實に研究せるものゝ等しく感ぜざるを得ないところである。この點はかつて那須博士も氣付かれたことであつたと記憶するが、面白いことには高田博士はそれに對する答文に於て、「私はマルサスを否定する、マルクスを否定する」と繰り返しながら、那須氏自身の所説こそマルサス説だから、こゝに根本的な見方の相違がある、といふ風に論を進めて行かれたことである。高田博士の自信は強い。そしてそれは吉田氏の極言せらるゝやうに必ずしも全部が「マルサス説の縮小再生産」でないことも、事實であらう。だがしかし、疑念は依然として第三者の頭から去らない。高田博士にとつては、それはむろん、どうでもよいことであらう。しかし理論の發展を絶えず眼中に置くものには重要な問題である。序でながら「人口思想史論」の著者玉井茂氏も、ある機會に高田博士の人口方程式について云ふたことがある。この方程式は「從來他の多くの學者のつとに熟知し、且つ他の言葉を以つて言ひ表はして居たものを數學的公式の形に

59) 『經濟往來』昭2年12月號所載批評文。その著『人口食糧問題』に第五篇として収録。

60) 『經濟往來』昭3年9月號所載「私の人口理論」。後にその著『價格と獨占』に収録。

表現し改めたものに過ぎない、⁶¹⁾と。——但し「十年史」の筆者にはこれ以上を云ふ権限も義務もないであらう。

附言するが、高田博士にはなほ次の二つの一般的人口論文がある。昭和五年五月の「食糧問題の社會性」⁶²⁾と、十年六月の「人口政策の缺乏」⁶³⁾である。前者は食糧問題の意義を探ぐつて「所謂人口問題と此問題との差異、聯絡」を説かうとするもの、後者は日本に於ける人口政策の缺如を指摘し、政策の樹立、しかも社會政策と結びつけたる人口政策の樹立を、提唱せるものである。即ち曰く、「日本の人口政策はたゞ生るゝものに、詳しくいへば、生れんとする胎兒に、生きよと號令をかけるだけである〔所謂墮胎の嚴禁〕。しかも彼等はなにゝよつて生きうるのであるか。よつて生くべき生活資料はこれを、身を資本主義經濟といふ混亂のたゞ中に投ずることによつて、つかみ取らねばならぬ。號令のかけつばなしで、それ以上の人口政策を講じない。」⁶⁴⁾又曰く、「今日の日本のなすところは、たゞ生れよ生きよと號令するばかりである。號令したるものはよろしく、生活を保證せねばならぬであらう」⁶⁵⁾と。本論は傾聽すべし、但し「十年史」の筆者はこれを手にして、ひそかなる微笑を禁じ得ざるものがあつた。「産めよ殖えよ」の論争の酬はなりし頃、筆者はひとり退いて如上の提案に内在する問題を理論的に取りあげ、「人口法則と生存權論」の述作に耽りつゝあつたわけである。——こゝで吾々は漸くにして、八年がかりの論争の回顧から筆を洗ふて、或ひはこの論争と無關係に、或ひはこの論争に刺戟されて、成長しつゝあつた人口理論の一般的及び特殊的研究の叙述に向ひ得る一段に到達したのである。

61) 春秋社版『大思想エンサイクロペヂア』第20巻，昭4年7月刊，178頁。

62) 『經濟史研究』7號（昭5年5月），172-187頁。

63) 『エコノミスト』13年16號（昭10年6月1日），22-24頁。

64) 同上 22頁。

65) 同上 24頁。

第三章 人口問題・人口理論の一般研究

こゝで人口問題・人口理論の一般研究といふのは、ある特定の人の學說なり特定の國の問題なりを主題としたものでなくて、一般的に人口問題の理論的研究を目指したる論著を指してゐる。従つて例へばマルサスやマルクスの人口理論の研究とか、歐米の出産率減退の問題とかを主題としたものは除外して、これを後の章下に譲つて行かうと考へる。むろん人口理論の一般研究と銘打つたところで、これらの人々の學說や個々の國の事實問題を全く離れて成り立たう筈はないのであつて、かういふ分類の仕方には非常な無理と不正確とが潜まざるを得ないのであるが、それだけの了解を豫め乞ふて置いて、單行の著作は後で、論文を先に、といふ順序で始めることにしよう。

先づこゝに二つの學生論文がある。筆者が學生であるといふことを知り得たのは、むろんその論文を讀んでからのことで、論題名や雑誌名からは判り得る筈がない。その一は中村正一氏「人口論の序說的研究」¹⁾、その二は坂根哲夫氏「過剩人口小論——主として基礎理論を中心として」²⁾である。前の筆者は「現今世界を通じ、人口研究の盛んなる、又我國諸先輩の論議漸く旺なりと雖へども、何人も其の部分的見解より各々自説の強制的首肯を敢へて求めんと試みるものあるのみにて、未だ其の完全なる組織的研究に就き、發表に接したることなく、或ひは世界を通じてさへ殆んど之無しと聞きては、吾人は遂に驚かざるを得ず」³⁾となし、「今日、自ら人

- 1) 拓殖大學『拓殖文化』32號(昭2年12月), 149—176頁。
- 2) 山口高商『商學研究雜誌』8卷(昭5年12月), 101—119頁。
- 3) 『拓殖文化』32號, 150頁。

口を論ずる者も、徒らに自説を張りて、恰も其の全體を認識せざるものゝ如し。彼の河上博士の如き、將又、高田博士の如き、共に其の正鵠を失したるものとす。尙彼の Marx と Malthus の人口概念は、全然之れを別個のものなりと斷ずるを得べしと雖へども、吾人は斯る議論の前に、忠實なる基礎的研究の必要を感じ、⁴⁾こゝに「吾人は、大膽にも『人口學』の提唱を以つて、吾人と共なる先輩の意志を繼承せんとするものである⁵⁾」と論じ起してゐる。その志や壯といふべし。本論は主として「人口論の科學的性質」を吟味して、人口論と經濟學、政治學、生物學、社會學、統計學との關係を論じ、結局人口論はその何れの學科にても蔽ひつくしがたく、別個獨立の地位を有すべしと説かうとする。即ち曰く、「人口問題の科學的研究は其の何れを以つてするも完全なる説明を爲す事を得ず。即ち概問題は何れの學問にも專屬せしむべき性質のものに非らず。寧ろ獨立の學問としての人口學の建設を要求す⁶⁾」と。徒らなる論争に奔命して組織的、體系的なる研究を等閑に附してゐた日本の學者こそ靜思すべきであつたらう。

坂根哲夫氏の論文は「向井教授校閲」となつてゐるが、「過剩人口」の意義からマルサス人口論とマルクス人口論とを對照的に吟味しようとする。マルサスカマルクスか、或ひは又高田か那須か河上かと、混迷の中にたゞすむ可憐なる一學究でこの筆者も亦あつたのである。次の結語はいつはらざる告白である。——「二十世紀の來るやマルサスをつなげる鎖を放せる經濟學界は時代の流れにつれて更にマルクスへ、又進みてはマルサスカマルクスか乃至は他の人口法則か、又更に進んでマルサスとマルクスと更に他の人口法則、と云つて人口論は

4) 同上 151頁。
5) 同上 152頁。
6) 同上 161頁。

絶えず新しき思潮の流れを見たのであるが、而して之等の急潮は互に自説の永遠性を見出さんとする。之等の流れは大なる破紋を描きつゝ盡くる所なく續けられてゐる。吾人は之等の一論一駁に直面し、右す可きか左す可きかの十字街頭の迷ひを感じざるを得ない」と。それはたしかに「十字街頭の迷ひ」であつたらう！

さて學者の研究論文として先づ目につくのは小泉信三教授の「人口論」である。この論文の掲載誌『財政經濟時報』は東京商大に缺號のため態々慶應義塾圖書館を訪ふて探ぐり得たものゝ一つであるが、筆者名と論題とから豫想してゐたものとは聊か異なつて、ヨーロッパ戦後最初のマルサス覺醒者として知られたるケインズ、及びマルサス反對者たるオッペンハイマー、の二氏の所説を簡単に紹介し、それに短評を加へたものであつた。筆者の態度がマルサス理論の眞理性の支持に終始傾いてゐることは周知の事柄であるが、なほその點はマルサス研究の章下で取扱ふことにしよう。

同じ年、同じ慶應の人——今は立教大學教授ときく——竹村豊太郎氏は「經濟學に於ける過剰人口論の不可能」を發表してゐる。この人は昭和初めの兩三年間に、なほ後の諸章に於て舉示するやうな注目すべき二三の勞作を發表したが、特に本論文は人口論の經濟學的性格を究明しようとした點で、この十年間に、あとにも先にもない出色の文字を成してゐる。今は否として人口論壇から消息を絶つてゐるのは『十年史』の筆者のみ寂寥を感じるころではあるまい。——それはともあれ本論文は、經濟學は價值増殖を目標とする經濟生活の主體たる「人口」を取扱ふべきものである、従つてこの見地に支配せらるゝ「人口」には過剰は理論的に起り得

7) 『商學研究雜誌』 8卷, 119頁。

8) 『財政經濟時報』 14卷 8號 (昭2年8月), 27—31頁。

9) 『三田學會雜誌』 21卷 11號 (昭2年11月), 131—162頁。

す、經濟生活の主體たる人間は「生殖」を前以つて規制する、といふ主張を一貫せしめてゐる。即ち先づ筆者によれば、「人口過剰とはある國民經濟内の全人口が平均して從來慣熟の代償によつては從來慣熟の物質的欲望の満足を行ふことが出来ないで居る現實の状態を云ふ」¹⁰⁾のであるが、この事實上は起り得べき、又起つたところの「人口過剰」が何故に經濟學上は不可能となるか、といふ論證は次の通りである。

「經濟行爲は嘗て經濟原則と稱せられた合理原則、即ち最小の犠牲によつて最大の効果を獲得せんとするの主義によつて指導される」。むろん事實上は必ずしもこの原則通りにはゆかず、全く反對の結果を生むことさへある。しかし科學はその智識の組織體系たる本質のゆゑに、この多様な事實に選擇を加へる。如何にしてか？「經濟學が一の文化科學として文化價值なる総合的な目的を成就せんが爲にその特殊なる一面としての經濟價值の獲得を意志し或はその喪失忌避を意志するに於て成立する以上、經濟行爲に於ける犠牲と効果との比較上種々に起る場合のうち經濟學としての本態は犠牲が効果より小であることに於てあらねばならぬ。經濟學が文化科學として考へられる限り其の對象となる經濟行爲の積極的意義は單に合理法則に指導されると云ふばかりでなく、更に進んで最も多くより少なる犠牲によつて最も多くより大なる効果を獲得すること、即ち最大の餘剩價值獲得、を目標とするにあると云はねばならぬ」¹¹⁾。然るに他方「經濟學に於て人口が問題の材料となるのはそれが經濟行爲の主體たる爲であり、そして然るのみであり、従つてこの場合人口は經濟行爲者集團として常に餘剩價值獲得を、而して出来るならば最大の餘剩價值獲得を遂げつゝあるを以て本態とする。……最大

10) 同上 147頁。
11) 同上 147—148頁。

のと云はずとも苟くも單に餘剩價值獲得をさへ遂げつゝある限りの人口の支配する富の總量が減少することは、絶對にあり得ない。富の總量が減少しないならば、生活程度降下を意味する人口過剩現象は、人口増加に
よらざる限り、起らない。而して同様に、經濟力の本態も亦減少せざるにあるから、經濟力それ自身は經濟理
論的には人口過剩現象の原因とならない。「富の總量の減少即ち經濟力の退化による人口過剩は可能なる又屢
々實現した事實として經濟史の問題ではあるが、積極的に理論の問題となることからは除かれる。」¹²⁾

そこで、人口過剩は「經濟力の退化」から離れて人口の増加から起り得ることが考へられる。即ち「人口は
經濟力に無關係に且つこれを超過して増加する恒常の生物學的傾向を持ち、而して人口がもし一たびかく經濟
力に無關係に増加（或は減少してさへも）すればそれが必然的に收穫遞減法則の作用を促し、其結果として人
口成員個々に割當てて計算した富の平均量の減少が不可避であること確實であるからには、人口過剩が起り得
べき事實たること又今までも起つて來たことは承認される」。「然し事實として起るだけなら經濟力の悪化を
原因とする人口過剩さへ同様であつた。問題は、それは果して、正統派經濟學を中心として經濟學界の大部分
の論斷であるやうに、經濟學の對象としての人口の本質であつて、經濟行爲を營める人口が到達すべき必然的
方向であるのか、」といふことに集中する。けれども「以上の假定が事實可能であるには、かゝる場合人類が常
に生活程度の保持が不可能となるのを顧みずに生殖によつて人口増加を遂行することを選ぶに相違なければな
らない。これは、少くとも經濟的考慮が働く場合の人間には、明にあり得べからざる選擇である」¹³⁾。

12) 同上 149—150頁。

13) 同上 154—155頁。

かくて筆者は結論的部分に於て云ふ、「殆んど全ての人口論者の考への中にある、人口増加があつて後に耕地が擴張され或は技術や産業進化があつたと云ふ歴史觀は天動説と同じやうに因果を顛倒したものである。それは生活する人が先づ現はれて後に生活程度を維持する物質の供給の生じたことであり、生活のない先に人口の存在を肯定する暴論である。しかも新に増加した人口は十數年を経なければ自ら生活を行ふ能力を持たない。否、不思議にも、彼等がより明瞭に云ふやうに食料のある以前に人口はあり得ないのだ」。むろん人は性慾に促がされて生むであらうが、生活低下の恐れから生兒壓殺、墮胎、禁交、獨身、晩婚等の風習となつて、それが阻害される。これは「人類がその經濟生活にある限り其終局的目標達成の爲に自己の本能的慾望の一つ或は其満足の結果を否定することが最有利であることを知つて居るからである。人類は其生活條件を無視して生殖を行はない。其の生活程度が維持され向上される時だけに生殖が行はれ、従つて人口の増加が起る」。かくて「人口は本質として決して過度の増加をもなさないし従つてかゝる傾向をも持たない。故に經濟學が人口を以て過剰ならんとする傾向を常に持つが如くに論斷するのは誤りであり、……其の常に持つ傾向を云々せんとするならば、むしろ其反對に、人口は過剰ならざらんとする傾向を常に持つと云ふべきである。人口は自ら調節して適度たらんとするの傾向を常に持つ。過剰たらんとする傾向が人口の本質であると云ふ意味の人口過剰論は經濟學に於ては不可能である。¹⁴⁾」

以上、紹介が甚だ長くなつたが、本論文の示す特色がそれを敢へてせしめたのである。筆者竹村氏の行論に

14) 同上 158—161頁。

はなほ嚴密なる検討を加ふべき餘地が残されてゐるやうに思ふが、ともかくもこの一文は人口論の經濟學的取扱の上に一つの異説を投げかけ、反省の機會を與へたものと云はねばならない。爾來八年間、人口文献は山の如く出てゐるが、右の一文に觸れたものを見出し得ないのは、日本の學者が如何に自國の文献に冷淡であるかの一證左と云へるであらう。

雜誌論文としてはなほこの外に、昭和三年には乾精末氏「國際問題としての適度人口」¹⁵⁾と中島九郎氏「人口問題の考察」¹⁶⁾があり、越えて昭和七年には菊田貞雄氏「『理想人口』に關する一考察」¹⁷⁾、同九年には岡崎文規氏「人口問題序説(一・未完)」¹⁸⁾、同十年には井森陸平氏「人口小論」¹⁹⁾などが出てゐる。乾精末氏(當時東京商大英語科講師)はその前年の國際人口會議に列席した人であるが、本文はその會議に發表せるフェアチャイルド氏の所説を紹介し、適度人口を確定することの困難なる諸事情を指摘しながら、しかもよく今後の研究に示唆的な所見を述べてゐる。短文平易のものなれども有益である。曰く「一國の適度人口は有無相通するの世界經濟の上に立脚せなければならぬと思ふ。幼稚なる工業にして而も前途有望なるものは除外例とするも、全然保護に倚らざれば立つことの出来ない産業等を保護し、何時惹起するか解らない戦争を見越して自給自足を高調力説するが如きは、戦争を全然無視するものと等しく、國家の人口問題解決上、一層之を混亂紛糾せしむるものである」²⁰⁾と。同じ問題をより學術的に取扱ふたのは菊田貞雄氏(明治學院高商教授)の長論文であらう。「この小文の目的は『理想人口』の史的考察及び検討をなすこと、『理想人口』の内容は不可變、劃一的のもの

15) 『外交時報』555號(昭3年1月15日)116—125頁。

16) 北海道帝大『經濟學農政學研究資料』第20號, 229—247頁。發行年不明, 執筆日附昭2年12月。

17) 『明治學院高商論叢』3號(昭7年11月)128—160頁。

18) 『彦根高商論叢』15號(昭9年6月)23—35頁。

19) 『鳥取農學會報』5卷3號(昭10年9月)189—202頁。

に非ずして、可變、多様なを述べることである²¹⁾。一とわたり optimum idea の「史的考察」が意圖されてゐる。但し典據は極めて貧弱で、叙述又頗る簡略である。近時の論者としても僅かにウォルフ、フェアチャイルド、トムソンに觸れるに過ぎない。しかし何よりも悪いことは、宗教的熱情が理論を妨げてゐることである。曰く「理想人口とは廣義に於ける個性の完成と民族の進化に最も適する人口である²²⁾」。ガンデイは印度民族の更生のために「性慾の抑制」を説いてゐる、「同様に日本には日本独自の理想人口があるであらう²³⁾」。「結論として『理想人口』とは社會を進化せしめるモオティヴ・パワーである個人の生命力を成長・發達せしめ、個人並びに民族生活の充實と繁榮を計るに最も適する人口なりと我等は信ずる²⁴⁾」。然らば日本の「理想人口は何千萬か？これは何人も答へ得ない問題である。若し『理想人口』があり得るとしても、それは頗る漠然たるものである²⁵⁾」と筆者は云ふのである。

中島九郎博士の論文は人口問題の歴史、近代に於ける人口現象の特異性、人口過剩問題と其對策、の三項より成つてゐる。歴史の項下でマルサスを紹介して曰く、「マルサスの人口論に對しては幾多反對の聲が擧げられるが、其の多くは枝葉末節の非難に過ぎず、其大本に至つては永久亡びざる眞理を藏することを認めねばならぬ。時勢の變遷上アダム・スミスはマルクスによりて其影を薄らぐことがあらうけれども、獨りマルサスは殆んど他に競争者なく超然として陸離たる光彩を斯界に放つであらう²⁶⁾」と。力強いことである！因みに筆者は北海道帝大農學部教授である。農學部と云へば井森陸平氏も鳥取高農の人だが、この人の論文は人口の理

- 20) 『外交時報』555號, 124頁。
21) 『明治學院高商論叢』3號, 131頁。
22) 同上 156頁。 23) 同上 157頁。
24) 同上 160頁。 25) 同上 159頁。
26) 中島氏前掲論文 235—236頁。

論、歐米諸國の人口問題、我が國の人口問題、の三項より成り、マルサス理論の觀點を根幹としてゐる。即ち一方生活資料を人間の手によつて獲得せらるゝ限りのものとし、他方人口の増加を欲望の増進、生活程度の向上と結びつけて考へ、かくて「人口に、その欲望、生活程度をも含めて考へる時には、一見過剰に見える生活資料も悉くの人の欲望を満足せしめるには足らず、この意味に於て、マルサスの人口法則は人類の運命を支配する鐵則として依然その作用を止めないであらう」²⁷⁾。従つて歐米諸國に於ける人口減退の兆も、決してマルサスの理論と矛盾するものでなくて、ただ「高度の文明生活から醸し出されたる、人口増加への悪影響を考慮の外におくならば、現時の歐洲人口の停頓は、その生活資料が猶人々の理想とする生活程度を充たすには足らない、といふ事實に起因すると言はねばならない。さればこの限りに於ては、生活資料が人口を制約する、てふマルサスの人口法則は依然として通用を失はぬものと言へよう」²⁸⁾と論じてゐる。マルサス理論を現代的に解釋しようとする點に苦心が認められる。なほ岡崎文規氏（彦根高商教授）の論文は「主として、Mombert, P., Bevölkerungslehre. Burgdörfer, F., Das Bevölkerungsproblem を参考にして書いたものである」と附記されてゐる。人口統計學に造詣ふかきこの筆者から「人口問題序説」をきくことは嬉しいが、遺憾乍ら本文は未完のまゝに終つてゐる。取扱はれてゐる範圍も人爲的出産制限の問題が主で、筆者の態度は、それは民族の自殺であるといふに傾いてゐる。

さてこれより單行の著作類である。こゝでは論文集は勿論のこと、昭和初年に百河の決するが如き勢ひもて

27) 井森氏前掲論文 195頁。

28) 同上 198頁、原文すべて片假名。

刊行された『全集』『叢書』類中の纏まつた論稿をも便宜上含めることにしよう。すると先づ目に止まるのは昭和元年五月に出た大西猪之介著『人口と国力（評論集）』であるが、この著者は不幸夭折して昭和年代の空気を呼吸し得ない人であつた。本書の首篇「人口と国力」はもともと大正八年に執筆發表されたものに屬してゐる。人口論者としての大西教授の面目はむしろ『大正年史』——もしも誰れかがそれを書くとしたら——に躍動するものとして描かるべきであらう。³⁰⁾ 然るとき、この章下に擧ぐべき昭和初十年間の全所産は、刊行年順にして次の通りである。

南亮三郎著『人口法則と生存權論』菊判三九三頁、昭和三年一月、同文館。

矢内原忠雄稿『人口問題』、『社會經濟體系』第十五卷、二七一—三〇七頁、昭和三年二月、日本評論社。

矢内原忠雄著『人口問題』四六判二三二頁、昭和三年二月、岩波書店。

失業労働者同盟失業對策同志會編『人口問題集』（失業問題叢書第三卷）四六判二三八頁、昭和三年八月、失業問題叢書刊行會。

下村宏著『人口問題講話』（朝日常識講座第一卷）四六判三二一頁、昭和三年十月、東京・大阪朝日新聞社。

清水靜文著『人口問題の研究』菊判二八七頁、昭和四年六月、文啓社書房。

玉井茂稿『人口問題』、『大思想エンサイクロペディア』第二十卷、一七一—二二六頁、昭和四年七月、春秋社。

藤井萬三郎稿『人口理論』、『經濟學全集』第七卷「經濟學特殊理論」下、三四七—四七二頁、昭和四年十二

29) 東京寶文館刊。

30) これについては拙稿、大西教授と人口論——遺著『人口と国力』を讀みて、『商學討究』I卷上冊所載（後に拙著『人口法則と生存權論』に収録）、及び宮田喜代藏氏稿、大西教授「經濟原論」の出發點としての人口、『國民經濟雜誌』44卷3號所載（大西猪之介全集第II卷に収録）を參照。

月、改造社。

永井亨稿「人口論」(『現代經濟學全集』第二十二卷、一四一—二八六頁)昭和六年五月、日本評論社。

寺尾琢磨著「人口食糧問題」(『世界經濟問題講座』第四部「世界經濟政策」中の一冊)菊判一〇三頁、昭和七年十一月、春秋社。

南亮三郎著「人口理論と人口問題」菊判四三三頁、昭和十年五月、千倉書房。

以下順次に簡單なる解説と評註とを加へて行かう。

先づ拙著「人口法則と生存權論」であるが、これは大正末年より昭和初年にかけての論文集で、人口法則と生存權論、人口法則と産業豫備軍の學說、人口法則と社會組織、人口法則と社會問題、「人口論」の社會政策、行き悩める日本の人口問題、人口文献批評、の七篇に、人口行脚ほか三文の附録、を收めてゐる。主としてマルサス及びマルクスの人口理論に題材を採つたものであるが、人口問題と社會問題との理論的交渉をマルサスの線に沿ふて掘り下げて行かうとするところに筆者の意圖はあつた。但し評註は自分で出来ないもので、勝手ながらこゝで一二の所感を附記する。山口高商の雑誌に松岡進氏「マルサスとゴドインの論争を中心として見たる個人主義と社會主義の人口問題觀」³¹⁾といふのがある。學生の論文であるらしい。ふと見付けて讀み出してみると、何だか十年前の筆者自身が書いてゐるやうな氣がし出した。眞實のところ、それは——烏澁がましい言ひ分ではあるが——「人口法則と生存權論」が當時一部の學徒にどんな感銘を與へてゐたかを想像せしむるに

31) 山口高商『商學研究會雜誌』6卷1號(昭3年10月)25—41頁。

充分である。又最近三重縣下に在住の一友人が三重高農の一雑誌を送つて来てくれたが、それには田中稔氏「人口、食糧問題を觀る」³²⁾といふ一論文が出てゐる。披いてみるとその「序言」はかう讀まれる――

「世に生を享けて自ら生命を支へ得ざる時、社會に向つて其の保證を主張し得る權利ありや。現今の制度は之を否定し、哀れむべき貧者の生命は只餓死へと自由に身を委ねる。ダーウインは自然淘汰の大旗を翳してゐる。自然の盛んなる饗宴に彼等は空席を見出し得なかつたのである。マルクスは生存權を否定する。それは人口が食糧の増加以上に増加すると言ふ根本問題の避け難き歸結であつた。生存權を承認せんか、當然の結果として私有財産制度は否定される。私有財産制度に見る『結婚と産兒の自由の抑制』は此處に撤去され、驚くべき人口増加を誘發する。かくして到達する所は、大衆を率ひて貧窮の楷梯を昇ることであつた。然らずんば出生權の否定である。生存權の否定か出生權の否定か、將た又貧窮か。驚嘆すべき人類繁榮時代を劃し科學を誇り文明を稱揚する。されど人口問題の波濤依然として荒れ狂ふのである」³³⁾と。そして（「生存權對人口法則の問題」を讀みて）と附記されてゐる。

文中の「マルクス」はむしろ「マルサス」の誤植である。「人口法則と生存權論」の著者は、はからずも、こゝでもまた無名學徒の知己を見出してゐるのであつた。なほ失業労働者同盟失業對策同志會編「人口問題集」には第一編として、人口法則と産業豫備軍の法則（南亮三郎）、人口問題と現代國家の矛盾（長谷川萬次郎）、人口増加と社會進歩——人口學說史小觀（高橋誠一郎）、第二編として資本主義末期の人口過剩（河上肇）、我

32) 三重高農『校友會雜誌』7號（昭4年3月）7—26頁。

33) 同上 8頁。

國の過剰人口（野田信夫）、本邦人口過剰問題（高野岩三郎）の六文を収めてゐるが、本稿の筆者自身は當時海外にありて自分の論文がかういふところに、しかも先輩諸學者と肩を並べて収載されてゐようとは知らなかつた。上野圖書館での最近の検索がそれを初めて知らしてくれたのであつた。

次に矢内原教授の、同じ年同じ月に出た二著であるが、先づ『社會經濟體系』に收められた論稿『人口問題』は、問題の所在、マルサス人口論、マルクスの人口論、人口問題の對策、の四章から成る簡潔な述作である。著者の見るところでは「結局人口〔問題〕は人口支持難の問題に屬する。生活難、貧困の問題こそ人口問題の實體を成す。人口問題の解決策とは、従つて生活難の解決策である」。そしてこれに對する二つの代表的洞察はマルサスとマルクスとによつて與へられたので、「人口問題理解の鍵は結局マルサスの人口論とマルクスの人口論、及び兩者交錯の問題に歸する」³⁴⁾。かくて次の本論的部分に於てこの兩者の人口論を述べるといふ順序をとつてゐる。こゝでの著者はマルサスの所説により多くの眞理性を認めるに傾いてゐるやうに思はれる。即ち、マルクスの人口論を述べたる後で「マルクスの人口論とマルサスの人口論とは相交錯しつゝ兩者共に生きて居る」ことを認め、特にマルサスの所説については「生活資料の社會的生産の總量と、分配を受くべき人口の總數とが、各人の富の程度に影響を持たぬ筈がない。各階級各個人の貧富は直接には分配の状態に依存するけれども、生産總量及人口總量は分配の限度を形成する」として、マルサス説がマルクス説と並び生きること説き、なほ(1)人間の構造及土地の性質に關する自然法則に基く貧困の説明、(2)個人責任の高調、(3)社會上政治上

34) 『社會經濟體系』15卷，274—275頁。

制度の改革による人類完全化の否定、の三點についてマルサス説の重要さを指摘してゐる。特に右の第一點につきては曰く「蓋し社會は自然に働きかかると共に又常に自然の内に生活する。土地の面積及生産力の有限なることは人口増殖の自然的傾向と相俟ちて、人類にとり、殊に限られたる面積を有する或る一國にとりて、マルサス人口論をば現實の問題たらしめる。人類はそれ自體が自然の一部であり、社會と自然とは相互的影響に立つ以上、人口論の自然法則的説明も亦意義を保つ³⁵⁾」と。

同じ著者の單行書『人口問題』は、より包括的、より組織的な述作であつて、この人の代表作と見られるものである。人口と社會、人口問題の歴史、マルサスの人口論、人口の増加、食糧の供給、人口と失業問題、人口問題と社會制度、人口問題と國際關係、の八章から成り、個々の章の記述は非常によく整備されてゐる。けれどもその理論的部分は、綜觀して纏まりのつかないものとして讀者の腦裡に残る。といふのは、——理論の中心部分は矢張りマルサス説とマルクス説とが占めてゐるのであるが、著者がこゝで意識的に左袒するのはマルクス説である。即ち著者は、現實の問題は「食糧缺乏ではない。食糧を購ふべき所得、所得の源泉たるべき仕事の不足若くは缺乏である³⁶⁾」と云ひ、「人口問題を論ずる多くの者は依然としてマルサスに倣ひ、人口増加率と生活資料の供給とを論議の中心と爲して居る。……併し乍ら現實の社會苦は生活資料の缺乏ではなくして産業の不振であり、人口増加率ではなくして失業者の増加である³⁷⁾」とも云ふてゐる。然らば人口對食糧といふ意味のマルサス的人口問題は問題となつてゐないかといふに、この觀點は本書中に於て非常に大きな役目を演じ

35) 同上 290—292頁。

36) 岩波書店刊、矢内原氏『人口問題』169頁。

37) 同上 183頁。

てゐるのである。特に終章の「人口問題と國際問題」などは専らこの見地から論ぜられてゐる。曰く「人口問題は國際的解決を必要とする。國際的人口問題の中心は各國家間の人口と天然資源分配の不均衡に存する。人口の國際的分布、土地の國際的利用、原料品食糧品の國際的管理、生産物の國際的交換が合理的に行はれるのでなければ、國際的人口問題は根本的解決に到達しない。この必要は各國民の社會組織が資本主義たる社會主義的となるを論じない³⁸⁾」と。けれども、もしも「人口問題」が、然り「現實の社會苦が生活資料の缺乏ではない」としたら、その「國際」的側面もまた異なつて來はしないか。少くとも「天然資源分配の不均衡」などは、その場合直接の問題とはなり得ないやうに思はれる。——要するに本書には、見地の無意識的混同が見られる。前論稿とは反對に、むしろマルクスを前景に立たせるやうに見えて、しかもマルサスの觀點が背後に嚴存してゐるのである。著者が結末に於て、「かくして人口問題は困難とその克服を通じて人類發展の槓杆となる。而して人の爲し能はざる處を神は必ず爲し遂げ給ふであらう³⁹⁾」と云ふところなどは、どう見てもマルサスの、しかも第一版時代のマルサスを聯想せしむるに充分である。しかし、本書は先づ全體として好著だ。初學者入門の書として最適の一つであらう。序でながら、ゴッドウインの著「研究者」が出版せられたのは一七九八年だといふ記述⁴⁰⁾は、一七九七年の誤記乃至は誤植である。なほこの著者には昭和三年に「人口食糧問題と社會制度⁴¹⁾」といふ一文が出てゐるが、これは「人口食糧問題と社會制度との關係について、人口食糧問題が社會制度によつて如何なる影響を受けて居るか」を歴史的に述べたもので、人口問題の史的敘述として讀まるべ

38) 同上 230頁。

39) 同上 232頁。

40) 同上 84頁。

41) 『社會學雜誌』45號(昭3年1月)41—60頁。

きものである。

下村宏博士の「人口問題講話」は第一章地球と人類、から始まつて第十章人口問題大觀、に至るまで豊富な時事的資料を織り込んで書き流された書物である。その自序の末尾に題言風の言葉を記して曰く、「食糧問題憂ふるに足らず、人口問題憂ふべし。人口の増加憂ふるに足らず、體質の低下憂ふべし。體質の低下憂ふるに足らず、精神の頽廢眞に憂ふべし」と。以つて著者の精神を示し得べきか。

清水静文氏（慶大教授）の「人口問題の研究」は、概論、人口變動の地理的原因、人口變動の社會的原因、人口の變動、人口に對する思想と政策、我國の進路、の六編二十六章より成り、附録として「河上肇博士の批判を批判す」を載せてゐる。筆者は當時これを海外にあつて一讀したが、あまり興味をひかなかつたものか書込みも殆んどなく、印象も殆んど残つてゐない。序文を披いてみるとかう書かれてゐる——「政治、外交、經濟、社會、思想等に關する諸問題の根底に横はる普通〔？〕的性質を有する人口問題に付て根本的國策を樹立し、而して後此大方針に隨つて諸般の改造を實施すべきものである。政府も人口食糧調査會を設けて其對策を樹立しやうとしてゐるが、如何にも微溫的である。國家百年の大計の上より見て、此問題は最重大なるものなるが故に、一大輿論を喚起して國是を確定する必要があらう。聊この要求に資することを得」たい、と。本書の性格一般はこれから察せられるかも知れない。

次に進みて玉井茂氏（明大教授？）の論稿「人口問題」。これは人口問題の意義、マルサス人口論、マルクス

餘剰人口論、人口の増加力、人口制限と生活資料、労働人口と相對的人口過剰、オブテイマム・ナムバー（結論）、種々の人口問題解決策の批評、の八章より成る。この人は後章に説く通り、はじめて人口思想史論を書いた人で、『大思想エンサイクロペヂア』がこの人を捉へ來つたのは至極適當であつたらう。さういふことも手傳ふて本稿の筆者も右の論稿『人口問題』に注意を拂ふた。さて著者は初めに人口問題の意義を明かにし、次いでマルサス及びマルクスの吟味を行ふた後に曰く、「予はマルサス及びマルクスの各々が提出した人口問題の存在を認める。然し乍ら彼等各々の指示した解決には満足しない。マルサス説とマルクス説とは彼等の説くが如くにしてはお互に矛盾相容れざるものであるが、前者によつて提出せられた絶對的人口問題、及び後者によつて指摘せられた相對的人口問題は、之れを他の方法によつて吟味する時には、互に併存し得る問題として、調和的に其の各々の理論を立てることが出来るのである。マルサスの結論とマルクスの結論とは矛盾するが、マルサスの問題とマルクスの問題とは調和し得る。是れが本論文の立場である」と。而して「最後の結論」は、「要するに抽象的論議（「マルサスの意味に於ける」）の結論としては、人口増加力と生活資料生産力との關係は色々に變化するものである、と云ふ以上の法則を立てることは出来ない」。然るに「具體的な現代社會に於ける人口と生活資料の對立は、特色的に労働人口と労働需要の對立として具現して居る。而して此の前者の増加割合は、資本主義經濟の影響の下に、後者の増加割合よりも大である。其の結果は、相對的生活資料不足、資本主義的過剰人口、即ち労働失業人口となつて現れて居る。……要するに現代社會に關する具體的論議の結論として労働

42) 【大思想エンサイクロペヂア】20卷, 191頁。

人口の代表する勞働供給の増加割合は、資本主義經濟の影響の下に、勞働需要の増加割合よりも大である、と云ふ法則を立てることが出来る⁴³⁾。そしてこれが著者の謂ゆる「眞の相對的人口理論」⁴⁴⁾なのである。なほ著者は「人口問題の解決は、社會と人口との兩方面から圖られなければならない」として、「オプティムム、ナムバ―、イン、オプティムム、ソサイエティ (optimum number in optimum society)。適當の社會に適度の人口。これが最も正しい解決の途である」と述べ、この意味に於ける人口調節思想の起源たるギリシア哲學者になぞらへて、自説をば「人口論上の新ギリシア主義又新プラト―主義」と呼んでゐる。着想には充分の新味がある。序でながらこの著者にはなほ「人口理論の再轉回」⁴⁵⁾その他の論文があるやうだが、掲載誌容易に手に入らずして筆者はまだ目を通してゐないのである。

藤井萬三郎氏(當時横濱商專教授)の『人口理論』は緒論、人口思想の史的發展、人口の變動及其の構成、人口と經濟との關係、人口理論上の異説、結論、の六章より成つてゐるが、著者は「此の小篇に於て(1)人口變動の事實、(2)人口と經濟との關係の本質、(3)近代資本主義國に於ける人口問題、(4)我國に於ける人口問題を究明す可く努めた」と自序してゐる。蓋し本著に於て最も特色的なことは、右の第二點——人口と經濟との關係に着目し、その相互依存の關係を歴史的及び理論的に考察しようとして試みた所にあらう。

著者は先づ、「我々の經濟活動は一方に於て活動の主體たる人と、他方に於てその客體とも云ふべき經濟財とを前提とする。此の經濟財の生産、分配の量及び方法如何は主體たる人の數の増減に最も直接的なる影響を

43) 同上 208—209頁。

44) 同上 202頁。

45) 明大『政經論叢』4卷1號。

及ぼし、又人口の増減、構成其他凡ゆる變化は同時に經濟財の變動に重要な關係を持つ。かくて人口と經濟（經濟財を中心とする凡ゆる經濟行爲及經濟組織の總稱）との間には密接なる相互關係が成立する」と説き起してゐるが、著者によれば正にこの「二者の關係が人口理論の對象であると云ひ得る。故に人口理論の對象は之を二つの方面から考察するを要する。一は種々の經濟的社會的事情を受けつゝある事實的人口の増減構成等を明確ならしむることであり、他は人口増減と經濟發展との關係を糾明することである」。かくて「今問題とする人口理論は經濟學の對象としての人口に關する理論である、⁴⁶⁾といふのが、著者の根本的態度である。

ところが本著はその最も特色的なる「人口と經濟との關係」を取扱ふ第四章に於て、最も粗雑にして生硬なる論述に満ちてゐるのが見られる。一例を挙げると、この章の第四節「人口と社會組織」で、社會組織の變動は人口組成の變動を意味するが、然らば人口組成の變動は何によつて起るかとの問を立て、曰く、「こは畢竟史觀の問題である。マルクスの唯物史觀が人口を重視したことは言ふ迄もない。然し乍らマルクスの唯物史觀は史觀の本質より見ても又高田博士の第三史觀の立場よりしても容易に否定せられ得る⁴⁷⁾」と。借問す、マルクスの唯物史觀は人口を重視した？ これはまた珍らしい「マルクスの唯物史觀」もあつたものだ。そしてその唯物史觀は「史觀の本質より見ても又高田博士の第三史觀の立場よりしても容易に否定せられ得る」？ 面白い「否定」の仕方もあつたものである。次に又同じ章の第五節「過剰人口の意義及び種類」は本著の性質から云ふても重要な節であらねばならぬが、これなど頗る生硬である。生硬といふよりも文意が全くとれない個所

46) 『經濟學全集』第7卷の下、351—352頁。

47) 同上 442頁、傍點引用者。

さへある。著者はこゝで、一國の「人口包容力とはある人口數を一定の生活標準に於て支へ得る經濟力の限度を意味する」と規定して次の通りに記述する。――

この「人口包容力の限度とする數を超へて人口が増加する時過剰人口は移住によつて整理せらるゝか又は若し移住が不可能ならば營養不足、貧窮、飢餓等の人口抑壓力が作用して死亡率が増加しなければならぬ。此の意味に於ける過剰人口を相對的及び絶對的の二つに分つことは多くの學者によつてなさるゝ所である。相對的過剰人口とは考へ得可き最も好都合なる條件の下に於て可能なる最大限度を超過したる人口數であり、絶對的過剰人口とは與へられたる條件の下に於て可能なる最大限度を超過したる人口數である。而かも人口包容力を決定する所の自然的經濟的社會的文化的關係は自由に變更し得るものでないが故に絶對的過剰人口は何等の意味を有しないこととなる。従つて過剰人口と云ふは必ず相對的の意味に於てあらねばならぬ。即ち一國の人口包容力の限界内に於て與へられたる一定の状態、又は限度が標準となる。――〔以下注意せよ〕――そは一國の經濟的關係、即ち國民の福祉の關係が最好都合なる如き人口數の限度である。換言すれば人口一人當りの經濟的福祉が最大なるが如き人口數である。之を最上限度 (Optimum) と呼ぶならば絶對的人口過剰の限度は最大限度 (Maximum) と呼ぶ可きである。最大限度は前述の人口包容力即ち固有の資本と勞働と（土地はその生産物が資本勞働の生産物と交換せられ得るが故に是をあくるを要しない）が正に賄ひ得る人口數である。而して最大限度即ち人口包容力は自然的經濟的、社會的政治的文化的關係の變動と共に變動する云々」⁴⁸⁾

48) 同上 446—447頁、傍點原文。

この一節など讀んで解し得る人があらうか？ 言葉が六づかしいといふのではない、行論に喰ひ違ひが起つてゐるのである。かういふ記述が大衆向きの『經濟學全集』に飛び出して來るのだから、たまつたものではない。よく考へてみると、右の記述はアモンの『國民福祉學原論』⁴⁹⁾からの粗雑な無斷借用なのである。右の記述では、人口の Optimum は「相對的過剩人口」を指し、人口の Maximum とは「絶對的過剩人口」を指してゐるやうに讀み取られる。しかしアモンの原文では、過剩人口は常に相對的過剩人口であるから人口の Maximum 云々は相對的意味に於て「一國が養ひ得る」限りの人口を指し、そしてこの意味の Maximum と、謂ゆる Optimum とを區別して、「Optimum は原則として Maximum より小さし」と説くのである。「絶對的過剩人口」の「最大限度」などそこでは何れの場合にも問題になつてゐない。問題は「相對的過剩人口」の限度と、それよりも一步手前のところで觀念せらるべき人口の最適度数 (Optimum) との區別なのである。

しかし何よりも解し難きは次の第六章の結論であるかも知れない。そこで著者は日本の人口問題を取扱ふが、「我國の人口問題の特殊性」は歐米諸國に反して生活標準の上昇と人口増加率とが「相平行して進みつゝある」ことだとして、その對策を論じて云ふ、「人口問題解決の最も根本的なる道行として生活標準の低下が考へられる所以はこゝにある。而かも我國經濟の不景氣の救はるゝ道は生活標準の低下にあるに於てをやである」と。さうかと思ふと續いて曰く、「かくて我國資本主義經濟を發展せしむることが人口問題解決の唯一の方法である」。さうかと思ふと又曰く、「過剩人口を救ひ得るもの」として「残る所生活標準の低下のみ」⁵⁰⁾と。かな

49) A. Amonn, Grundzüge der Volkswohlfstandslehre, I. Teil, Jena 1926, S. 342—343.

50) 同上 471—472頁。

り混亂してゐるが、一言にして、民衆の暮らし向きを引下げたら「我國經濟の不景氣」は救はれ、「資本主義經濟は發展」し、そして「人口問題は解決」される、といふのであらう。——たゞ一人、『第三史觀』の提唱者、『人口と貧乏』の著者だけは、意外のところでは知己を見出したわけである。

もしもこゝまで読みつゞけて呉れる讀者があつたとすれば、右の論述は『十年史』の筆者に許された権限を餘りに越えたものと思はれるかも知れない。だがしかし、著者病中の作であると附記されてゐたに拘はらず、それについて長い叙述を費して、くどくどと難點を指摘して來たといふのも、實はこの著者が人口と經濟との關係に着目してそれを組織的に研究しようとした日本最初の異彩ある文献であり、著者藤井教授また春秋に富める篤學であるやうに見受けられたからである。序でながら、同じ改造社のこの全集中には向坂逸郎氏の『人口理論』⁵¹⁾があるが、これは後にマルクス學說の研究の個所で取扱ふことにしよう。

改造社版が未だ一つの研究論文を發表したことがないといふ新人を掘り出して來たに反し、日本評論社の『現代經濟學全集』は『日本人口論』でお馴染の永井博士を動かしてゐる。その論稿『人口論』は、人口、人口問題、人口論、人口政策、の四章より成り、文末に人口食糧問題調査會人口部答申一覽（自昭和二年至同五年）を附載してゐる。この附録は便利である。著者の所説はしかし前著『日本人口論』に盡されてをり、こゝで再び云ふ必要はないであらう。もしも云ふことがあるとすれば、この著者が書かれるものほど要領の掴み難きものはなく、しかもその感じはこの論稿に於て一層強くせられるといふことである。

51) 『經濟學全集』26卷「マルクス經濟學說の發展」415—601頁。

寺尾琢磨氏「人口食糧問題」は、序論——問題の出発点としてのマルサス人口論、世界人口の現状、食糧生産の問題、人口と食糧との関係、人口政策、結論、の六章より成る。かなり包括的な研究であるが、そのうち特色的な記述として特に印象に残るのは第四章の「人口と食糧との関係」である。その中で曰く、「マルサスの重視した客觀的意味に於ける生活資料は今日の生産技術の下に於てはその重要さを失つて了つた。世界は人口増加に苦しむのではなく、過多の生産物に懊惱してゐるのである。問題はもはや生活資料の生産ではなくて、その分配である。換言すれば社會的意味に於ける生活資料だけが問題なのである。そしてこれが解決の曙光は既に現はれ始めた。一つは資本主義の没落であり、他の一つは産兒制限に基く人口の停滞乃至減少である。前者によつて分配の改善が期待され、後者によつて一般の社會的生活標準の向上が期待される」と。これによつてみると、人口問題は既に解決され「始めて」ゐることになる。だがしかし、この論著の初めの部分でマルクス説を批判するに、その師小泉教授の説を以てした筆者は、果して「資本主義没落」の後人口問題は全然存せざるに至ると考へるのであらうか。小泉教授の所見はさうではなかつた筈である。この點師の説と異なるのであるならば何故かを明示する要があるまいか？次に又、人口減退が問題を解決した如く説かれてゐるが、一體ヨーロッパ現在の問題は何であるか、彼等は既にそれを解決し終つたといふのであるか？——かういふ疑問が湧いて來る。

著者は最後に「人口政策」を説き、結局産兒制限を推すものゝ如く見られる。むろん著者はその効果を重視

52) 『世界經濟問題講座』第四部、寺尾氏『人口食糧問題』74頁。

53) 同上 5—6頁。

叙述として何程かの有用さを持つものであるとすれば、機を見て續篇を草するに至るかも知れぬ。同學諸氏の批判を仰ぎたい。(昭和十一年一月、東京商大研究室に於て)

叢, 13卷別冊, 昭10年11月), 館稔氏(人口問題, 1卷2號, 昭10年11月),
同じく館氏(日本社會學會年報社會學, 第3輯, 昭10年12月)等あり。